

山林崖崩れ対策工事に伴う発掘調査報告書

布志名焼窯跡群

令和 4 (2022) 年 3 月

島根県松江市
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團

山林崖崩れ対策工事に伴う発掘調査報告書

ふ　じ　な　や　き　か　ま　あと　ぐ　ん
布志名焼窯跡群

令和4（2022）年3月

島根県松江市
公益財團法人松江市スポーツ・文化振興財團



布志名焼窯跡群 連房式登窯跡（南から）



松江藩御用窯（土屋窯）関連出土遺物（陶器・押型・匣鉢）



物原から出土した布志名焼の日用品（陶器片・素焼品・焼損品）と窯道具（写真のみ掲載）

例　言

1. 本書は、令和2年度に実施した山林崖崩れ対策工事に伴う布志名焼窯跡群（19世紀前半の土屋窯・19世紀後半～20世紀初頭の本船木窯）の発掘調査報告書である。

2. 本書で報告する発掘調査は、株式会社グロースから松江市が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が委託を受けて実施した。

3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) 布志名焼窯跡群

(調査地) 島根県松江市玉湯町布志名 442 番 4 外

4. 現地調査期間

令和2年4月14日～令和2年5月29日

5. 開発面積および調査面積

開発面積 3.796m² 調査面積 221m²

6. 調査組織

依頼者 株式会社グロース

代表取締役 勝部 光晴

主体者 松江市

市長 松浦 正敬（～令和3年4月23日）

〃 上定 昭仁（令和3年4月24日～）

【令和2年度】 発掘調査業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 須山 敏之

松江市歴史まちづくり部 次長 松尾 純一

〃 〃 稲田 信

〃 まちづくり文化財課 課長 飯塚 康行

〃 〃 埋蔵文化財調査室 室長 尾添 和人

〃 〃 調査係 係長 川上 昭一

〃 〃 〃 主任 徳永 隆

調査指導 島根県教育庁 文化財課 文化財保護主任 稲田 陽介

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野 芳伸

埋蔵文化財課 課長 宮本 英樹

〃 調査係 調査員 徳永 桃代（担当者）

〃 〃 調査補助員 木村 由希江

【令和3年度】 報告書作成業務

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 須山 敏之（～5月31日）

〃 〃 松尾 純一（6月1日～）

〃 〃 次長 松尾 純一（～5月31日）

〃 〃 井上 雅雄（6月1日～）

松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 課長 尾添 和人
" " 文化財総合コーディネーター 丹羽野 裕
" " 埋蔵文化財調査室 室長 川上 昭一
" " " 調査係 係長 川西 学
" " " " 主幹 古藤 博昭
" " " " 副主幹 野村 豪士
実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 星野 芳伸
埋蔵文化財課 課長 宮本 英樹
" 調査係 係長 小山 泰生 (担当者)
" " 調査補助員 木村 由希江

7. 調査に携わった発掘作業員

安達明男、井川 智、門脇貴教、重田綾子、中村慎市、福田紘治、本田忠敬、峯谷一雄

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

木村由希江、角 優佳、坂本玲子、徳永桃代

9. 報告書作成にあたっては、以下の方から多大なご指導・ご教示を頂いた。記して謝意を表する。

布志名焼雲善窯 九代 土屋幹雄 (雲善)

松江市出雲玉作資料館 館長 片岡詩子、金森みのり

松江市史料調査課松江城調査研究室 西尾克己

島根県埋蔵文化財調査センター 阿部賢治

10. 本書の執筆は、第1章を古藤、第2～5章を小山が担当した。編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。

11. 連房式登窯概念図は目次末に掲載し、註と参考文献は各章末に記載した。

12. 本書に掲載する土層の色調は、『新版 標準上色帖』農林水産省農林水産技術會議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修に従って表記した。

13. 本書で用いた方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、水準値は海拔標高を示し、本文中では標高○mと記した。

14. 本書における遺構名の表記は、以下のように略号を冠した。

SD : 溝 **SP** : 柱穴・ピット **SW** : 石積

15. 本書に掲載した遺構図は、各図に縮尺とスケールを配した。遺物実測図の縮尺は、陶器と窯具類は1/3または1/4、鏡貨は1/2を原則とし、これに従えないものにはその都度縮尺を明記した。

16. 本書に掲載した布志名焼の窯元における舟木系窯の表記は、舟木村政窯・舟木窯・本船木窯・中舟木窯・瀧船木窯・雲寅窯・前澤窯・向澤窯・後福島窯・空福島窯とした。

17. 報告書作成は、遺構図・遺物図はIllustratorCC2022(Adobe社)を用いて浄書し、図版レイアウトおよび原稿執筆などの編集作業はInDesignCC2022(Adobe社)を用いて行った。

18. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は、松江市で保管している。

目 次

例 言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と環境 2

 第1節 地理的環境 2

 第2節 歴史的環境 2

第3章 調査の手法 7

 第1節 調査範囲の設定 7

 第2節 調査の方法 8

 第3節 布志名焼窯跡群の既往の調査 8

第4章 調査の成果 9

 第1節 調査の概要 9

 第2節 層序の概要 11

 第3節 窯跡 12

 第1項 窯体 12

 第2項 柱穴列 22

 第3項 外周溝 23

 第4節 物原 23

 第5節 その他の遺構と遺物 29

 第1項 近代石積 29

 第2項 黄褐色土出土遺物 31

第5章 総括 35

 第1節 布志名焼窯跡の窯元と年代 35

 第2節 松江藩御用窯（土屋窯）における布志名焼の特徴 37

 第3節 結語 39

遺物観察表

写 真 図 版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図 島根県・松江市位置図	1
第 2 図 調査地位置図	2
第 3 図 布志名焼窯元分布図（松江市玉湯町布志名地区）	5
第 4 図 事業予定範囲および調査範囲図	7
第 5 図 調査前地形測量図	9
第 6 図 布志名焼窯跡遺構配置図	10
第 7 図 調査区中央横断土層図	11
第 8 図 布志名焼窯跡平面図・断面図・東壁土層図	13・14
第 9 図 焼成室出土遺物（1）陶器・土製品	16
第 10 図 焼成室出土遺物（2）陶器	17
第 11 図 焼成室出土遺物（3）窯道具	18
第 12 図 素燒室・煙出出土遺物（1）陶器・磁器	20
第 13 図 素燒室・煙出出土遺物（2）土製品・窯道具	21
第 14 図 柱穴列 SP01～04（覆屋基礎）平面図・断面図	22
第 15 図 外周溝 SD01 平面図・断面図	23
第 16 図 物原平面	24
第 17 図 物原土層図	24
第 18 図 物原出土遺物（1）陶器・磁器	26
第 19 図 物原出土遺物（2）陶器・錢貨	27
第 20 図 物原出土遺物（3）窯道具	28
第 21 図 近代石積 SW01 平面図	29
第 22 図 近代布志名（若山周辺）推定復元図	30
第 23 図 「山陰道商工便覽」本船木窯（松江歴史館所蔵）	31
第 24 図 黄褐色土出土遺物（1）陶器・半磁器	32
第 25 図 黄褐色土出土遺物（2）窯道具・瓦	33
第 26 図 松江藩主・土屋系・舟木系の系譜	36
第 27 図 松江藩御用窯（土屋窯）関連出土遺物	38

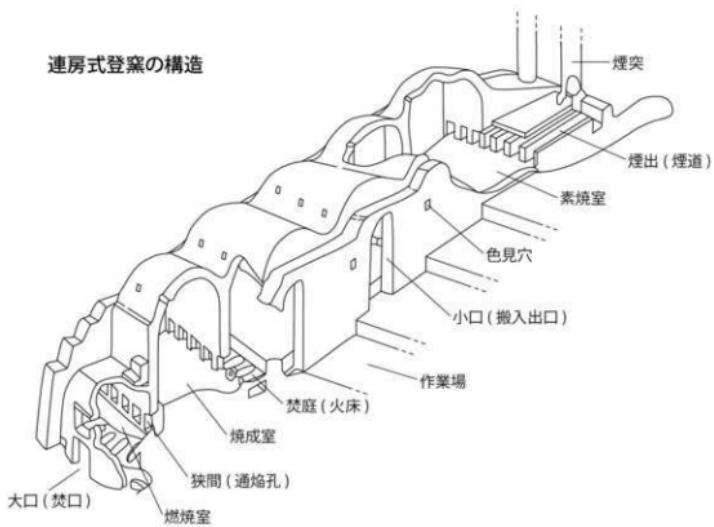
挿表目次

表 1	布志名焼窯元の操業年代	6
-----	-------------	---

図版目次

- 卷頭 1 布志名焼窯跡群 連房式登窯跡（南から）
- 卷頭 2 松江藩御用窯（土屋窯）関連出土遺物
物原から出土した布志名焼の日用品（陶器片・素焼品・焼損品）と窯道具
- 図版 1 調査地遠景・近代遺構
1 調査地調査前遠景（若山丘陵部）（西から）
2 近代石積（本船木窯別荘）検出状況（南から）
- 図版 2 窯跡
1 連房式登窯跡 検出状況（南から）
2 調査区中央横断土層断面（低位部）（北から）
- 図版 3 窯跡
1 連房式登窯跡 完掘後全景（南から）
2 連房式登窯跡 完掘後全景（北から）
- 図版 4 窯跡
1 焼成室 完掘後（南西から）
2 狹間（通焰孔） 完掘後（南から）
- 図版 5 窯跡
1 素焼室 小口・焚庭（火床） 完掘後（西から）
2 焼成室東壁 焚土・トンバリ・窯壁片堆積状況（西から）
- 図版 6 窯跡
1 狹間（通焰孔）・窯壁 完掘後（南西から）
2 窯壁 検出状況（南から）
3 焼成室 小口側窯壁 検出状況（南から）
4 素焼室 小口側窯壁 検出状況（南から）
- 図版 7 作業場・覆屋
1 作業場・覆屋（柱穴） 完掘後（北から）
2 作業場 完掘後（南西から）
3 作業場・連房式登窯跡 完掘後（北から）
- 図版 8 外周溝・物原
1 外周溝 SD01 完掘後（北から）
2 調査区北壁 物原土層断面（南西から）
- 図版 9 出土遺物①
- 図版 10 出土遺物②
- 図版 11 出土遺物③
- 図版 12 出土遺物④
- 図版 13 出土遺物⑤
- 図版 14 出土遺物⑥
- 図版 15 出土遺物⑦
- 図版 16 出土遺物⑧

連房式登窯の構造



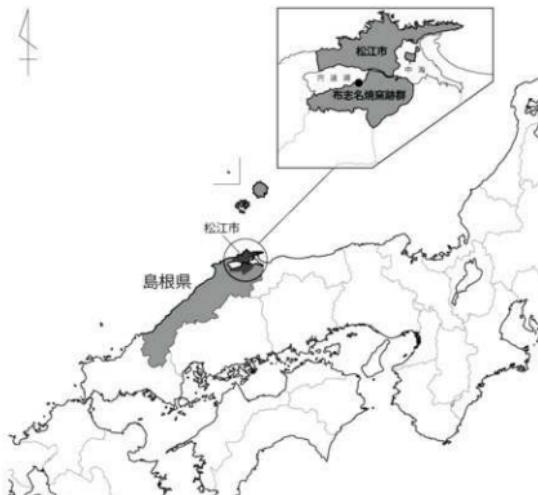
連房式登窯概念図

第1章 調査に至る経緯

平成30年6月に、松江市玉湯町布志名地内において民間の店舗新築に伴う埋蔵文化財の有無照会が事業者から提出された。当該地周辺は、寛延3(1750)年以降に「布志名焼」と呼ばれる陶器の生産が始まった場所として知られており、本船木窯跡・中舟木窯跡・空福島窯跡などの布志名焼窯跡群が窯業関係の生産遺跡として周知されている。当事業予定地内には、布志名焼窯跡が広がっている可能性が高いものと判断し、同年8月にその範囲を確認するため、松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を実施した。その結果、事業予定範囲内の東側で窯跡の一部と考えられる煉瓦列や焼土層を確認し、本船木窯跡(2号窯)として周知することとなった。

令和2年2月に、事業者から文化財保護法第93条に基づく発掘の届出が提出されたことから、この内容について島根県教育委員会に進達・協議したこところ、窯跡に影響をおよぼす範囲については発掘調査の指示を受けることとなった。これにより、令和2年2月に事業者から松江市に本調査依頼書の提出を受けたことから、同年3月に事業者と委託契約を締結し、同年4月14日から5月29日まで本発掘調査を実施したものである。

なお、当事業予定地内においては、窯跡の範囲確認前の平成30年4月に丘陵東端部で土砂崩れが生じ、住宅地に土砂が流出した。この復旧工事に伴う立会調査を実施した際に、現地において多数の陶器片や窯体片を採取しており、これらの遺物については松江市で保管している。また、令和3年度の報告書作成時において遺構と遺物の検討を行った結果、本窯跡は松江藩御用窯の土屋窯および民窯の本船木窯であることが判明したため、本書ではこれらを布志名焼窯跡群として扱うこととした。



第1図 島根県・松江市位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第2図)

島根県松江市玉湯町布志名は、松江市の中心市街地から南西へ約5km離れた宍道湖沿岸の独立丘陵地に位置する。基盤層は、今から約1500万年前～700万年前(中・後期中新世)に形成された堆積岩を地盤とし、微地形は砂礫洲に分類される。布志名地区は、東側に忌部川、西側に玉湯川が宍道湖へ向かって流れしており、この2つの川のほぼ中間地点に立地している。

布志名焼窯跡群は、宍道湖の南東岸に僅かに突き出た標高約18mの「若山」と呼ばれる丘陵地に所在する。本遺跡は、宍道湖岸から直線距離で南側へ約40m向かった丘陵上の東側にあたり、そこからさらに南東側へ約60m向かった丘陵裾部には「若山神社」と呼ばれる社が存在している。



第2図 調査位置図

第2節 歴史的環境 (第3図・表1)

布志名焼窯跡群が所在する若山周辺では、江戸時代後半～近代の布志名焼窯跡のうち12窯が窯業関係の生産遺跡として周知されている。若山は、布志名地区の集落がある沖積低地から宍道湖岸に存在する独立丘陵で、布志名焼窯跡群以外の遺跡は知られていない。この布志名地区から南西側へ約1.5kmの場所には碧玉や瑪瑙を産出することで知られる花仙山があり、その裾野には弥生時代末期～古墳時代にわたる墳丘墓・玉作工房跡・古墳などの遺跡が所在している。

本節では布志名地区的布志名焼窯跡について詳細を述べることとし、以下では布志名焼の概要と布志名地区的窯元を中心に概観する。

①布志名焼の概要

「布志名焼」は現在の松江市玉湯町布志名で焼成された焼物の総称である。その歴史は諸説あるが、江戸時代中期（18世紀後半）に始まり、布志名焼の窯元の系譜は舟木系・土屋系・永原系の3系統に大別される。寛延3（1750）年頃に舟木与次兵衛村政が穴道湖畔の布志名に開窯し、後の舟木系諸窯が日用品を焼成して繁栄する。安永9（1780）年に松江藩7代藩主松平治郷（不昧）^{ハラシキ}が土屋善四郎芳方・政芳父子（土屋窯）や永原与蔵順陸（永原窯）を登用したことにより、地方窯としては稀な雅陶を製作する。土屋窯と永原窯は幕末まで松江藩の御用窯として数々の優品を焼成している。

明治維新後は、舟木系諸窯を中心に会社組織を設立するなどして競争力を高め、布志名焼の販路を海外にも広げ、明治末から大正にかけて最盛期を迎えることとなる。そして、現在の布志名焼の窯元として、雲善窯・灘船木窯・湯町窯の3窯がその伝統を今に伝えている。

②布志名地区的窯元

【舟木系窯】

舟木村政窯 寛延元（1748）年に舟木助左衛門が現在の松江市乃木福富町に居住し、素焼のカワラケを焼いていたと伝えられている。寛延3（1750）年頃に、布志名焼の開祖とされる助左衛門の子・与次兵衛村政が現在の松江市玉湯町布志名に開窯し、当初は瓦などを中心に日用品を焼成していたとされている。明治初年頃、6代房一の時に閉窯。

舟木窯 布志名焼の開祖与次兵衛村政の長男である2代平八村政の次男・善十清人が、寛政年間（1789～1800）頃に若山の地を離れて開窯。3代藤平は、大甕（ハンド甕）などの作陶を得意とした。大正11（1922）年、湯町窯の前身である出雲陶器会社が設立された際に合併して閉窯。

本船木窯 布志名焼の開祖与次兵衛村政の三男である新蔵吉が、安永年間（1772～1780）頃に開窯。明治になって5代健右衛門岩次郎は、黄陶社や製陶社などを設立して経営にあたる。大正13（1924）年、6代美道の時に閉窯。

中舟木窯 舟木窯の初代善十清人の子・九蔵家久が、文化年間（1804～1817）頃に開窯。明治36（1903）年、3代良右衛門の時に澤藤右衛門らと舟木合名会社を設立して経営にあたる。大正11（1922）年に閉窯。

灘船木窯 本船木窯の3代健右衛門標高の子・平兵衛が、弘化2（1845）年に開窯。4代道忠は、昭和初期の布志名焼の民芸陶器への転換に尽力した。灘船木窯は現在も操業されている。

雲寅窯 舟木窯の3代藤平の子・寅次郎は、初めは兄の運一の窯で働いていたが、大正11（1922）年に舟木窯が出雲陶器会社と合併した際、永保山窯の一部を譲り受け開窯。令和2（2020）年、3代康定の時に閉窯。

前澤窯 布志名焼の開祖与次兵衛村政の次男である嘉助秀勝が澤家へ養子に行き、澤姓となる。寛政2（1790）年に開窯。6代喜三郎はドイツに留学した名工で、内国勧業博覧会の特別審査員や大倉陶園での製陶指導など日本陶界に名を残す。舟木健右衛門と製陶社を経営し、大正初年頃に閉窯。

向澤窯 前澤窯の初代嘉助秀勝の次男である藤右衛門直義が、寛政12（1800）年に分家して開窯。明治中頃に舟木良右衛門らと黄陶社を経営。昭和10年代、6代藤右衛門安孝の時に閉窯。

後福島窯 初代福島幸助は船木覚三郎周高の門人で、文政9（1826）年に独立して開窯。窯場が灘
船木窯の後ろにあったので、この窯元名がある。大正中頃、4代正道の時に閉窯。

空福島窯 後福島窯の初代幸助の次男又兵衛が、文久3（1863）年に開窯。隠居後は「豊常」と号し、
茶碗の優品を残している。昭和10年代、3代泰吉の時に閉窯。

【御用窯】

土屋窯 初代土屋善四郎芳方は、現在の松江市横浜町に居住していた土器屋であったが、楽山窯4
代加田半六が不首尾により任を解かれた際に、その後任として宝曆6（1756）年、松江藩6代藩主
松平宗衍の治世の時に「御給米拾俵二人扶持、帶刀御免、茶道支配御坊主並」を仰せつけられ、御
立山（楽山）焼物御用を勤めた。明和4（1767）年に襲封した松江藩7代藩主松平治郷（不味）は、
安永9（1780）年に善四郎芳方を現在の松江市玉湯町布志名へ移して焼物御用ならびに教方に命じ、
布志名周辺の陶工の指導にあらせた。

2代善四郎政芳は、父である初代善四郎芳方と同様に優れた名工であった。藩主松平治郷は善四郎
政芳をことのほか重用して「雲善」の号と瓢箪形の「雲善印」を授けた。善四郎政芳は輪轉技だけ
なく釉薬技にも秀で、高麗・青磁・織部・瀬戸など治郷の命に応えて様々な写し物を焼成している。
特に黄釉は善四郎政芳が、それまでの濁った黄味を帯びた平瀬釉から布志名焼の特徴となる美しい黄
釉を完成させたとされる。その後は3代善六起徳・4代善六啓助・5代傳太郎・6代武次郎・7代定好・
8代善四郎と続き、9代幹雄が雅陶を墨守している。土屋窯は雲善窯として現在も操業されている。

永原窯 初代永原与蔵順暉は、享和2（1802）年に布志名で開窯し、文化元（1804）年に初めて松
平治郷の御用焼物を製作した。文化13（1816）年に「帶刀御免、御茶碗師」を仰せつけられ、天保
8（1837）年に家格新組となる。初代与蔵順暉は「雲与」と号し、「八雲順暉」や「雲與」の印を用いた。
3代永助房則は、「房太郎」や「永助」の名がある名工といわれ、「雲永」の印を用いた。元治元（1864）
年、永助房則は先代を継いで松江藩10代藩主松平定安に仕えてお好み物を作陶し、明治維新をむか
えて黄釉の金彩色絵などの輸出陶も焼成した。明治末頃、4代由五郎の時に閉窯。

【その他の個人経営窯】

鍛冶山窯 明治初年頃に福間兼太郎が開窯。兼太郎の子・金之助が継承したが、満州に出向いたので
窯は一時衰微した。その間は福間善蔵が留守を預かり、事業を支えて盛大を致した。その後、善蔵は
湯町窯へ移る。昭和18（1943）年頃、金之助の子・正雄の時に閉窯。

昇雲窯 明治中頃、布志名の応神山に足立徳次郎が開窯。丸に「昇雲」の印を用い、茶器・香炉など
の染焼の雅物を焼成した。大正末頃、2代太一の時に閉窯。

永保山窯 明治10（1877）年頃、布志名の明国寺の北側に堀内梅太郎が開窯。2代豊太郎は夭逝し
たので弟の3代常市が跡を継ぎ、大正末期頃に米子へ移って「米城焼」と称して好評を博した。永
保山窯は、その後經營者が転々として一時休止したが、2代豊太郎の子・勇が昭和25（1950）年に
松江へ戻って永保山窯を開窯する。昭和61（1986）年、5代俊和の時に閉窯。

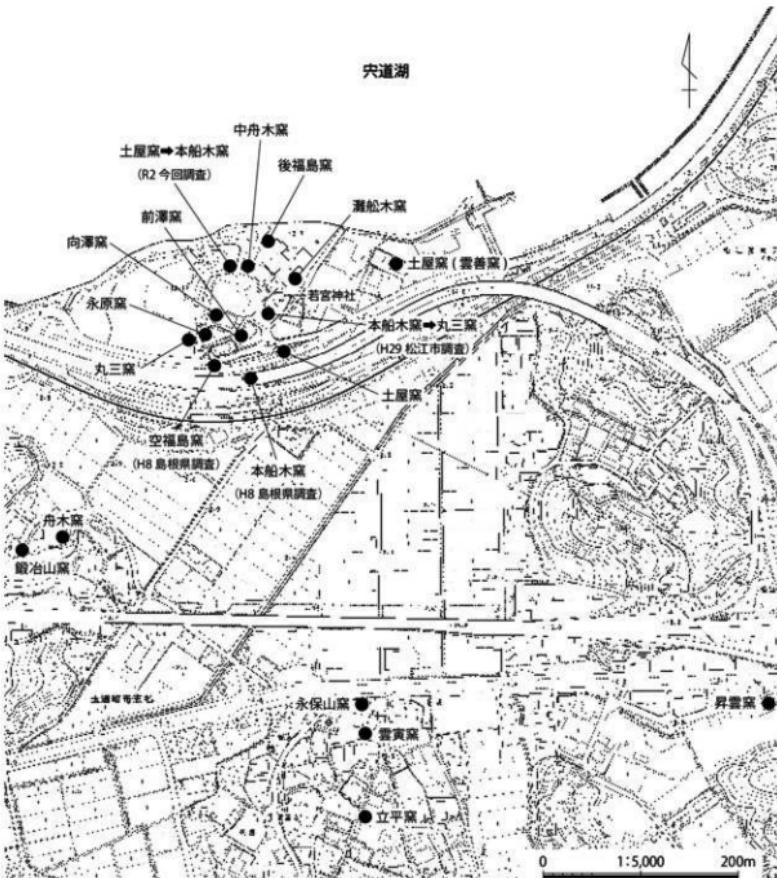
立平窯 明治中頃、布志名の明国寺の東側に下山市次郎が開窯。屋号の「立平」を窯元名とし、布志
名焼の雑器を焼成した。昭和初年頃、3代朝光の時に閉窯。

【共同窯】

若山陶器会社 土屋窯の5代傳太郎を中心に、布志名焼の諸窯が合同で明治10（1877）年に設立。明治17（1884）年に解散。

舟木合名会社 舟木良右衛門・澤藤右衛門・澤忠太郎により、黄陶社を引き継ぐ形で明治31（1898）年に設立。大正4（1915）年に事業拡大を図って資本導入を行い、名称を「丸三陶器商会」に改名。

丸三陶器商会 舟木合名会社を引き継ぐ形で大正4（1915）年に設立。大正末頃からの不況により事業は衰退し、昭和11（1936）年には陶窯を橋本義に譲り、舟木系丸三窯はなくなった。その後引き継がれて操業していたが、平成9（1997）年に閉窯。



第3図 布志名焼窯元分布図（松江市玉湯町布志名地区）

表1 布志名焼窯元の操業年代

窯元名	江戸	明治	大正	昭和	平成
舟木村政窯	寛延3年(1750年)				
舟木窯	寛政2年(1790年)				
本船木窯	安永9年(1780年)				
中舟木窯	文化年間(1804～1817年)				
瀬船木窯		弘化2年(1845年)			
雲寅窯			大正11年(1922年)		
前澤窯	寛政2年(1790年)				
向澤窯	寛政12年(1800年)				
後福島窯		文政9年(1826年)			
空福島窯		文久3年(1863年)			
土屋窯	安永9年(1780年)				
永原窯	享和2年(1802年)				
鍛冶山窯		明治初年(1868年)			
昇雲窯		明治中期			
永保山窯		明治10年頃(1877年頃)		昭和25年(1950年)	
立平窯		明治中期			
若山陶器会社		明治10年(1877年)			
舟木合名会社			明治31年(1898年)		
丸三陶器商会				大正4年(1915年)	

※年号表記は開窯の年代を示す。

参考文献

- 伊藤菊之輔 1967 『島根の陶窯』
- 出雲玉作資料館友の会 2013 『布志名の焼物 歩みと想いを語る』
- 出雲文化伝承館 2011 『布志名焼の美』
- 島根県教育委員会 1999 『小久白埴墓群』「付録 布志名焼窯跡群」
- 土屋善四郎 1987 『布志名焼の歩み』
- 松江市教育委員会 2019 『平成29年度 松江市埋蔵文化財年報』「第2節 埋蔵文化財の本調査 本船木窯跡」
- 松江市史編纂委員会 2012 『松江市史 史料編2 考古資料』「第6章第2節 299. 布志名焼窯跡」

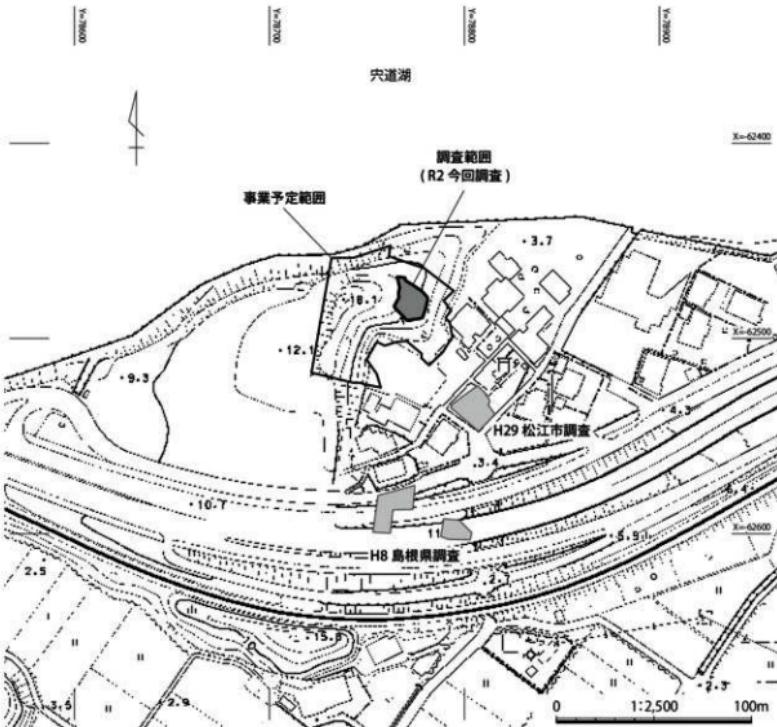
第3章 調査の手法

第1節 調査範囲の設定（第4図）

布志名焼窯跡群の本発掘調査対象範囲は、事業予定範囲の3,796m²のうち、平成30年4月に実施した松江市埋蔵文化財調査室による試掘結果から221m²を対象としている。

調査前の現況は山林および竹林で、本調査開始以前から調査区内南東側の丘陵斜面では直角に削平されている場所を確認していた。この削平部分北西側の法面には、煉瓦・来待石・陶器片・窯道具片などが一部剥き出した状態で貼り付いている状況であった。

調査箇所は発掘作業の工程上、調査区内の中央に位置する削平部分の法面を中心に二分割して、法面から北西側にあたる丘陵頂部の平坦面から調査を開始し、続いてこの法面から南東側にあたる低位部の調査を行った。調査にあたってはグリッド設定を行わず、出土層位を記録して遺物の取り上げを行った。なお、時期や形態がわかる遺物については、出土地点をその都度記録して取り上げている。



第4図 事業予定範囲および調査範囲図

第2節 調査の方法

表土掘削と遺構検出

発掘調査にあたっては、調査区内南東側の丘陵斜面で直角に削平されている法面の直交方向に窯の長軸があるものと想定し、短軸方向で窯の両端を捉えるために幅50cmのトレンチを2箇所設定して土層堆積状況を確認した。この2箇所のトレンチでは窯跡は検出できなかったが、ここでは地山面の落ち込みを捉えることが可能であった。これにより、調査区の中央に法面と直交する形で、長さ16mを測る北西—南東方向の畦を残しながら遺構の検出を行うこととして調査を進めた。

表土掘削は、平爪を装着したバックホーを用いて除去し、以下は重機を併用しながら人力掘削によって遺構の検出を行った。遺構の検出は、鍔簾により精査した後、さらに草削りを用いて検出に努め、遺構の掘り下げは主に移植ゴテにより実施した。遺構内の調査は、平面的に全体を検出し終えた後、ベルトを設定するか半截を行い、切り合うものについては先後関係を確認した。

その後の段階で、各遺構の断面図を作成し、完掘後に平面図を作成した。出土遺物は、出土状況を記録した後に取り上げを行った。調査区の上層断面は、分層後に写真撮影を行い、報告書に掲載が見込まれる箇所の土層断面図を作成した。

調査の記録

地形測量および遺構の平面測量にはトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。平面図の方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用した。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺1/20で作成し、土層観察の注記は新版標準土色帖を使用した。

第3節 布志名焼窯跡群の既往の調査

これまでに実施された布志名焼窯跡群の発掘調査は、以下の2つの調査事例のみである（第4図）。

平成8（1996）年に若山の南側丘陵部で一般国道9号松江道路建設に伴い、島根県教育委員会による県下における近現代史上重要な生産遺跡として、初めて布志名焼窯跡の本発掘調査が行われた。調査は丘陵の西側を1区・東側を2区とし、遺構は連房式登窯跡7基・倒焰式窯跡1基・小窯跡3基を検出している。窯の操業期間は、出土遺物から江戸時代後半～明治中頃（19世紀前半～後半）と考えられている。また、出土した陶器や窯道具には窯印をもつものがあり、これらの遺物から1区は「空福島窯」、2区は「本船木窯」と想定されている。

平成23（2011）年に「本船木窯」の推定地において宅地造成工事の計画があり、松江市教育委員会による試掘調査を実施した際に窯跡が見つかり、平成29（2017）年にこの窯跡の本発掘調査が行われた。調査地は、松江市玉湯町布志名に所在する若宮神社の南西側隣接地に位置し、遺構は連房式登窯跡1基を検出している。遺構は窯体の基底部が遺存し、構造は下方から順に作業室・燃焼室・第1焼成室・第2焼成室からなる。検出した窯は「本船木窯●丸三窯」と考えられるが、窯の操業期間は、窯体を構成する出土遺物に明治25（1892）年創立の「三石耐火煉瓦株式會社」と刻印された煉瓦が出土していることから、この時期以降に築窯された「舟木系丸三窯」と想定されている。

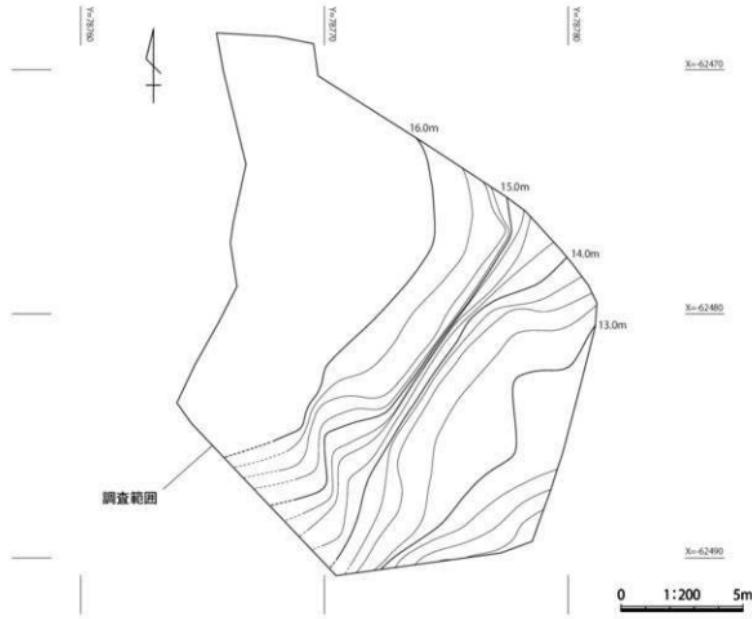
第4章 調査の成果

第1節 調査の概要 (第5・6図)

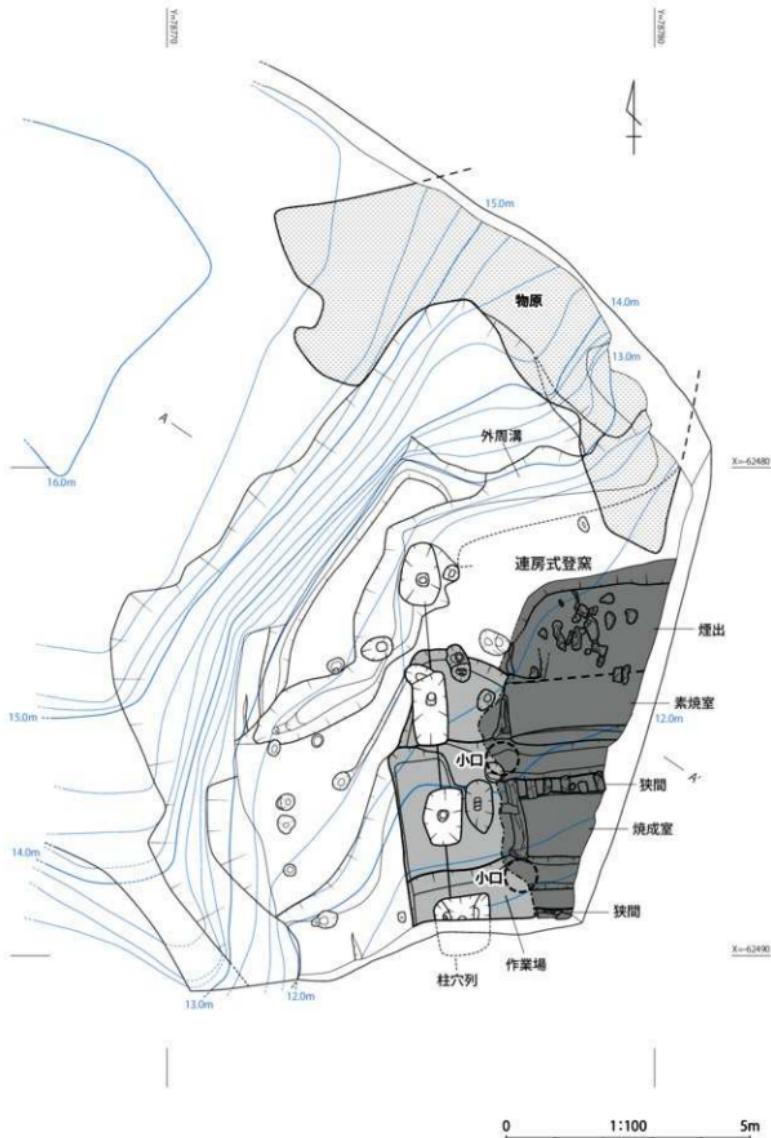
調査は窯跡の現況を記録する目的で、竹林等の伐採後に調査前地形測量から実施した。調査前の現地表面は、北西から南東方向に向かって傾斜をもち、その標高は調査区北西側の丘陵頂部で標高16.20m、法面上端で標高15.50m、法面下端で標高13.75m、調査区南東側の緩斜面で標高12.25mを測る。調査区北西端から南東端までの16m間における現地表面の比高差は3.95mである(第5図)。

第3章第2節で先述したように、窯跡の遺構配置は地表面観察およびトレーニング調査から想定できなかったため、調査区の中央に法面と直交する形で、土層観察用の横断畦(第6図A-A'間)を残しながら窯跡の検出を行った。

調査の結果、調査区南東側の緩斜面上に東西約8.3m×南北約8.5mの範囲で平坦面が作り出されており、この平坦面の東側で連房式登窯を1基検出した(第6図)。窯体構造は、階段状に加工された整地面上で、下方から焼成室・素焼室の2室と煙出を確認した。焼成室・素焼室の西側には小口⁽¹⁾と作業場が付属する。そのほか、窯体に付属する覆屋に伴う柱穴列SP01~04、窯体の北側で窯場の排水用と考えられる外周溝SD01の一部、そこからさらに北側の丘陵斜面上で物原を検出した。遺物は、窯体内・物原・窯体を覆う黄褐色土から出土し、出土量はコンテナ85箱分である。



第5図 調査前地形測量図

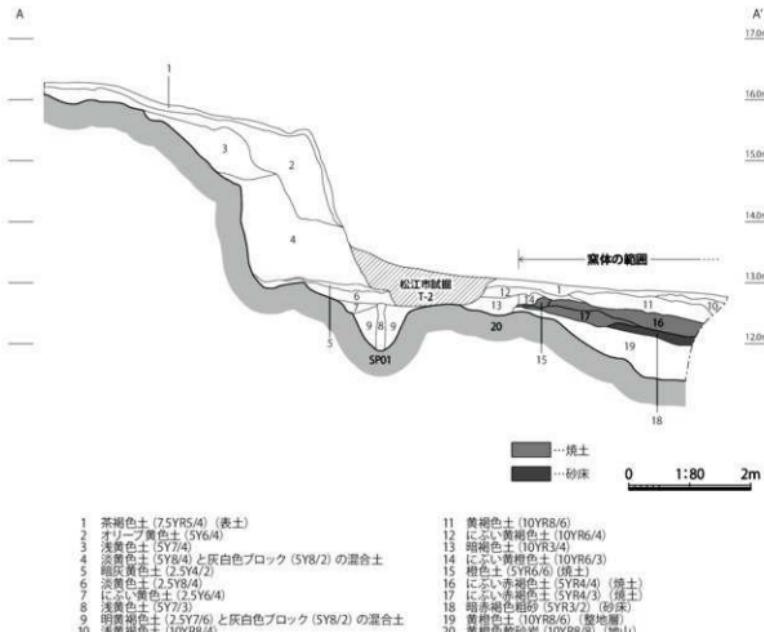


第6図 布志名焼窯跡遺構配置図

第2節 層序の概要（第7図）

調査区中央横断土層（第7図）を標準とした当窯跡の基本的な層序は、上層から表土（第1層）、黄褐色土（第10～12層）、赤褐色土（第15～17層：焼土）、暗赤褐色粗砂（第18層：砂床）、黄橙色土（第19層：整地層）、黄橙色軟砂岩（第20層：地山）からなる土層堆積を確認した。

第1層は、標高12.80～16.20mに堆積する層厚10cmの茶褐色土（表土）である。第10～12層は、標高12.70～12.90mに堆積する層厚30cmの窯体廃絶後（解体後）に堆積した黄褐色土で、遺物は陶器・窯道具・瓦などが出土している。第15～17層は、標高12.40～12.60mに堆積する層厚20～30cmの赤褐色土である。窯体内の基底部を形成する炭が混じる焼土だが、窯体廃絶後の堆積層と考えられる。遺物は、焼土中から陶器・押型・窯道具が出土している。第18層は、標高12.10～12.40mに堆積する層厚10～15cmの暗赤褐色粗砂である。窯体内の整地層直上に堆積する粗砂で、窯体機能時の砂床と考えられる。遺物は、砂床中から陶器・窯道具が出土している。第19層は、標高12.00～12.40mに堆積する黄橙色土である。窯体を築窯する段階に、丘陵斜面を平坦にするために施された整地層と考えられる。第20層は、黄橙色軟砂岩の地山である。地山面の検出標高は、調査区北西側の丘陵上部で標高16.00m、法面上端で標高15.50m、法面下端で標高12.80m、調査区南東端で標高11.40mを測り、北西から南東に向かって傾斜している。



第7図 調査区中央横断土層図

第3節 窯跡

第1項 窯体(第8図)

窯体は、調査区内南東側に位置する標高11.40～12.25mで検出した、南から北へ向かって登る連房式登窯である。窯体の検出全長は、東西最大幅3.2m以上、南北最大長7.0m以上を測り、主軸方位は南北でN-4°-Wにとる。窯体の天井部は遺存せず、基底部および窯壁と狭間(通焰孔)⁽⁴⁾の一部を検出するに留まっている。布志名焼窯は、概ね3～4室程度の焼成室からなる窯体構造とされているが、今回の調査では窯体上方で焼成室・素焼室の2室と最上部に煙出が遺存し、いずれも窯体の3分の1～3分の2程度を検出している。窯体下方の大口(焚口)や焼成室は、窯体の検出位置から調査区外となる南側に存在していたものと想定される。焼成室と素焼室の西側には、小口が1箇所ずつ設けられており、窯体の全体形は明らかとし得ないものの、窯体の遺存状況から片側小口の連房式登窯である可能性が高い。

窯体の床面は、東壁土層図(第8図A-A'間)に図示したように、黄橙色土(第16層)の整地層上面まで掘り下げながら検出している。焼成室から煙出の範囲内では、赤褐色土(第8～12層)を主体とする焼土と、その直下で暗赤褐色粗砂(第13・14層)の砂床の堆積を確認した。

窯体の傾斜は、縦断面(第8図B-B'間)に図示したように、焼成室から煙出までの傾斜角度は9～11°の範囲内である。また、焼成室と素焼室の西側で検出した焚庭と小口の周辺は、調査時に新旧があることを確認している。この新旧については、破損した焚庭と小口の周辺を補修しながら使用⁽⁵⁾していた痕跡と捉えており、窯体の造り替えや時期差を示すものではないと考えている。

窯体の西側には、各室内の前方にある焚庭(作業通路を兼ねる溝)と同じ高さのテラス状の平坦面をもつ作業場が付属する。作業場は3箇所検出し、後方の平坦面との間には10cm前後の段差がつき、階段状を呈している。作業場各段の平坦面は東西幅2.2～2.4m、南北奥行1.8～2.4mを測る。

以下では、焼成室および素焼室・煙出の規模・形態・出土遺物について個別に詳述する。

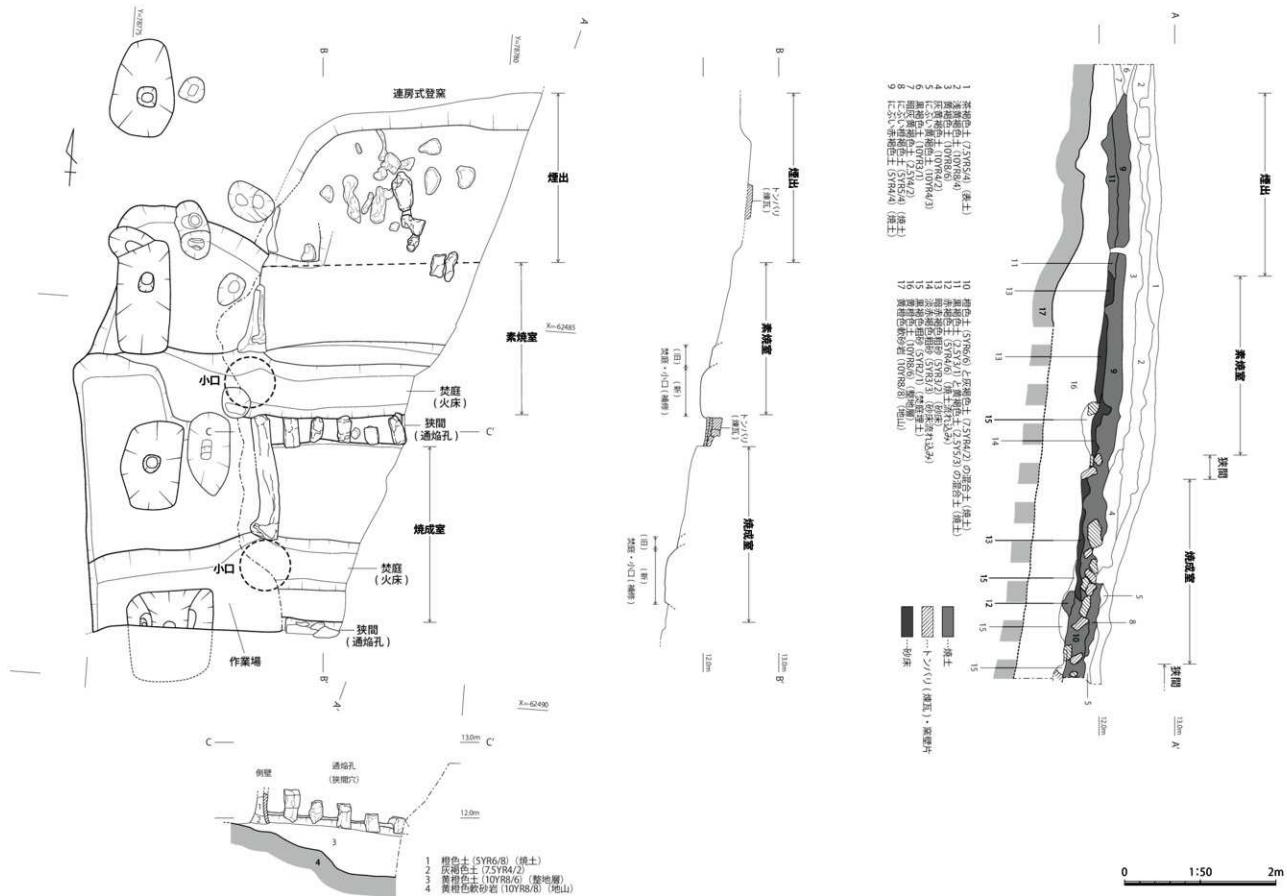
焼成室

検出した登窯下方に位置する焼成室は、天井部や狭間が取り付く隔壁のほとんどを欠損しているが、焚庭(火床)・狭間(通焰孔)・小口側の側壁の一部が遺存する。焼成室内前方にある焚庭は、東西長1.2m以上、南北幅70cm、深さ12cmを測り、浅い溝状に設けられている。

焼成室床面の検出規模は、全体形の3分の1程度と考えられ、東西幅1.5m以上、南北奥行1.3mを測る。焼成室は調査区外となる東側へ続き、平面形は東西方向に幅広の長方形になるものと想定される。焚庭から後方へ向かって9°程度上傾させてフラットに設けられた正座は、暗赤褐色を呈する粗砂を焼成室の全面に敷き詰めた砂床となっている。⁽⁶⁾

各室を連結する狭間(第8図C-C'間)は、東西長1.8m以上、南北幅35cmを測り、厚さ20～25cmの直方体煉瓦を1～2個体ほど段積みとして横一列に配置した横狭間式である。通焰孔(狭間穴)⁽⁷⁾の規模は、平均値で東西幅20cm、南北奥行30cm、高さ25cmを測り、5穴以上で構成される。

小口側の側壁は基礎部が遺存し、焼成室床面からの残存高40cm、厚さ6cmを測る。側壁は粘土を叩き締めて構築し、藁スサ混じりの粘土を用いて塗壁に仕上げているが、著しく剥落している。



第8図 布志名焼窯跡平面図・縦断面図・東壁土層図

焼成室出土遺物（第9～11図）

ここでは焼成室内の焼土および砂床から出土した遺物を掲載する。9-1～5は陶器の碗である。9-1は萩焼の系譜をもつ杉形碗である。内外面に灰釉を施し、高台は露胎。見込みに足付トチンの目跡が残る。9-2～5は丸形碗で、布志名焼のいわゆる「ぼてぼて茶碗」である。9-2・3は内外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。9-4は内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。9-5は浅黄褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴部外面の下方から高台脇にかけてケズリを施す。

9-6は型打成形の輪花皿の素地である。内外面に雲母（押型の剥離剤）が付着し、布目痕が残る。この輪花皿の素地は、松江藩の御用品⁽¹⁾と考えられ、後述する押型（13-2）とセットになる。9-7・8は陶器の小壺である。9-7は内外面に飴釉を施し、胴部下方から底部は露胎。底部外面に糸切り痕をもつ。9-8は9-7よりもやや大振りの小壺で、内外面に飴釉を施し、胴部下方から底部は露胎。底部外面に糸切り痕をもつ。9-9は土鍤である。灰白色を呈し、長さ6.0cm、最大幅5.6cmを測る。

9-10～10-1は陶器の鉢である。9-10は橙褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴部外面の下方から高台脇にかけてケズリを施す。9-11は内面から外面の口縁部周辺にかけて鉄釉を施し、口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。10-1は褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴部外面の下方から高台にかけてケズリを施す。10-2は陶器の片口である。注口は欠損しているが、内面から外面の口縁部周辺にかけて平瀬釉（灰釉）を施し、口縁端部を玉縁状におさめる。

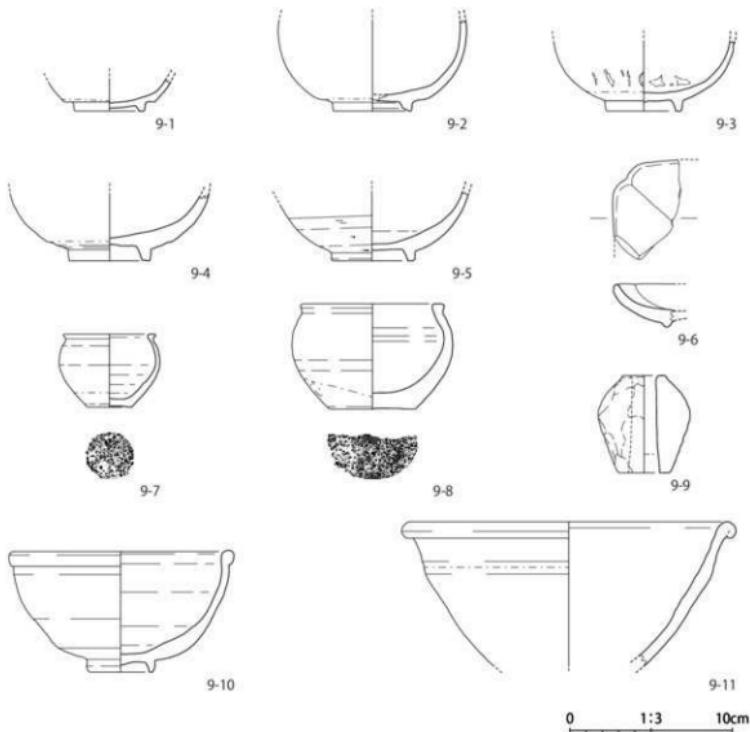
10-3～5は陶器の擂鉢である。10-3は無高台の平底の擂鉢で、内外面に透明釉を施す。見込みと底部外面に4箇所の目跡が残る。底部外面に糸切り痕をもつ。10-4は橙褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。器壁はやや丸味をもって立ち上がり、スリ目は8条を1単位として上端を揃える。口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。10-5は赤褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。器壁は直線的に立ち上がり、スリ目は8条を1単位として上端を揃える。口縁端部を僅かに折り返して玉縁状におさめ、高台端部を面取りする。

10-6・7は陶器の壺である。10-6は褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴丸形の壺で、肩部のやや下方に条線文を施す。口縁端部を平坦にして外側にやや突出させる。10-7は淡褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。底部のみ残存し、内外面を回転ナデで仕上げる。10-8～10は陶器の甕である。10-8は橙褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴丸形の甕で、肩部から胴部にかけて条線文を施す。肩部に指押えでボタン状の粘土を貼り付け、胴部内面に指頭圧痕が残る。口縁端部を平坦にして外側に突出させる。10-9は胴丸形の甕で、焼き歪みが生じている。鉄釉に灰釉の重ね掛けを施し、肩部から胴部にかけて条線文を施す。肩部に菊花文の陽刻で装飾を施す。10-10は胴丸形の甕で、焼き歪みが生じている。底部のみ残存し、内面に格子状のタタキを施す。

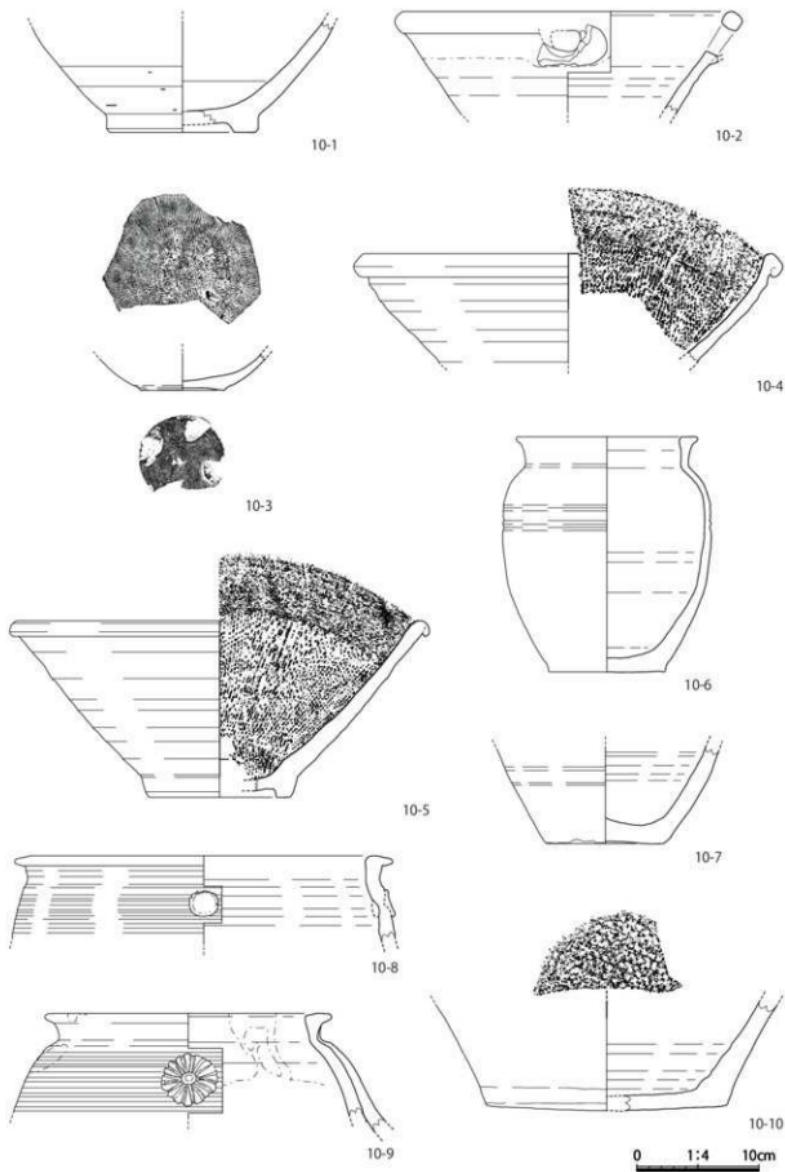
11-1～12は窯道具である。11-1は輪状の粘土紐（ヨリ土）である。粘土紐は、焼成時に焼台の上に置いた焼成品の底部に挟んで使用するもので、焼成品の転倒を防ぐために用いる。灰色を呈し、幅4.8～5cm、厚さ1.6cmを測る。上面に直径4.4cmの碗の高台の痕跡があり、中央に直径1.5cmの円孔をもつ。底面に1mm以下の砂粒が付着する。11-2～6はトチンである。11-2は赤褐色を呈する円柱形トチンで、直径6.4cm、高さ9.9cmを測る。11-3～6は赤褐色～黒褐色を呈する鼓形トチンで、

直径 6.2 ~ 9.2cm、高さ 10.1 ~ 13.8cm を測る。11-5・6 の外面には溶けた陶器片と 2mm 前後の多量の砂粒が付着する。11-7 は赤褐色を呈するラッパ状の中空の脚部をもつ筒形トチンで、天板は直径 14.1cm、接地面は直径 19.2cm、高さ 7.7cm を測る。

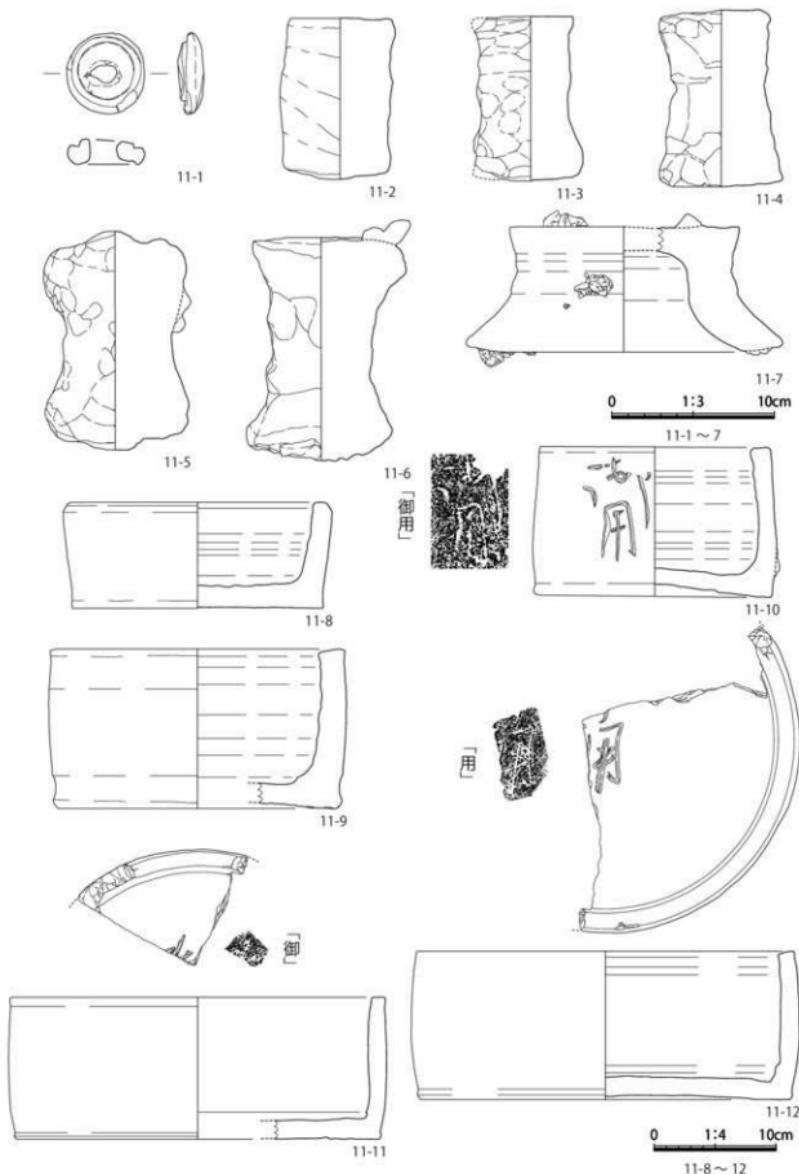
11-8 ~ 12 は円筒形の匣鉢である。匣鉢には、焼成品を入れる身とそれに被せる蓋があるが、11-8 ~ 12 はいずれも匣鉢の身である。11-8 は赤褐色を呈する匣鉢で、口径 19.6cm、器高 8.7cm を測る。底部内面に指頭圧痕が残り、外面に糸切り痕をもつ。11-9 は暗褐色～赤褐色を呈する匣鉢で、口径 23cm、器高 13.1cm を測る。底部外面の一部に緑釉が溶着する。11-10 は暗赤褐色を呈する匣鉢で、口径 18.5cm、器高 12.3cm を測る。胴部外面に「御用」の刻書を施し、底部外面に貝目積みの目跡が残る。11-11 は暗赤褐色を呈する匣鉢で、口径 30.5cm、器高 11.6cm を測る。底部内面に「御」の刻書を施す。11-12 は橙色～赤褐色を呈する匣鉢で、口径 30.7cm、器高 12.2cm を測る。底部内面に「用」の刻書を施す。11-10 ~ 12 は胴部外面や底部内面に「御用」・「御」・「用」の刻書が施された匣鉢であり、これらは松江藩の御用品を焼成（窯詰め）する際に用いられた匣鉢と考えられる。



第9図 焼成室出土遺物 (1) 陶器・土製品



第10図 焼成室出土遺物(2)陶器



第11図 焼成室出土遺物（3）窯道具

素焼室・煙出

検出した登窯上方の窯尻部に位置する素焼室・煙出は、焼成室と同様に天井部や狭間が取り付く隔壁のほとんどを欠損しているが、素焼室では焚庭（火床）・狭間・小口側の側壁の一部、煙出では通煙孔（煙道）の一部がそれぞれ遺存する。素焼室内前方にある焚庭は、東西長2.2m以上、南北幅70cm、深さ15cmを測り、浅い溝状に設けられている。

素焼室床面の検出規模は、全体形の3分の2程度と考えられ、東西幅2.8m以上、南北奥行1.7mを測る。素焼室は調査区外となる東側へ続き、平面形は東西方向に幅広の長方形になるものと想定される。焚庭から後方へ向かって11°程度上傾させてフラットに設けられた正座は、暗赤褐色を呈する粗砂を素焼室内の全面に敷き詰めた砂床となっている。

煙出の構造は、遺構の遺存状況は原形を留めていないが、基本的には奥壁基壇上に直方体煉瓦を横一列に並築して煙道を設けた吹抜け式と想定される。煙突状施設の有無については不明である。

素焼室・煙出出土遺物（第12・13図）

ここでは素焼室内の燒土および砂床と煙出内の燒土から出土した遺物を掲載する。12-1～4は陶器の碗である。12-1～3は丸形碗で、布志名焼のいわゆる「ぼてぼて茶碗」である。12-1は内外面に青地釉を施し、高台は露胎。12-2は内面に藁灰釉と赤色の辰砂の重ね掛け、外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。12-3は淡褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。12-4は端反碗で、外面に青地釉を施し、高台は露胎。

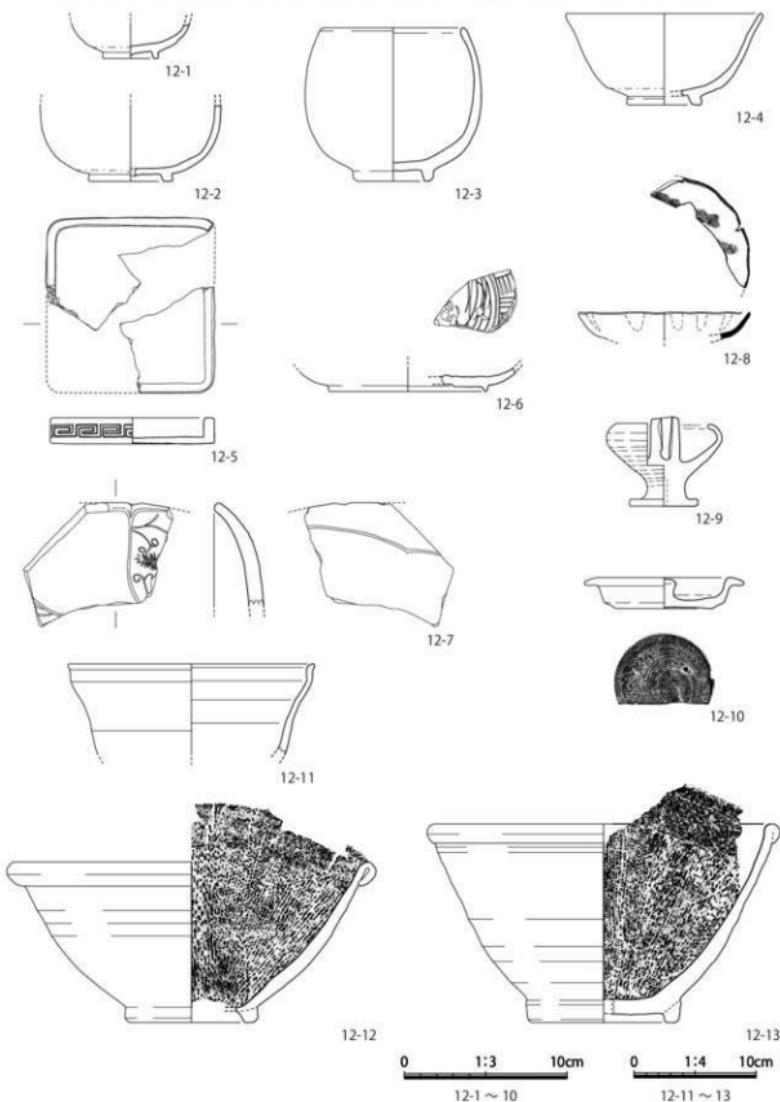
12-5～7は陶器の皿である。12-5は交趾焼の写し物の四方皿である。外面に緑釉を施し、口縁部外面に雷文帯を廻らす。12-6は型打成形の皿で、黄釉製品の色絵素地である。口縁部内面に格子文、見込みに草花文の陽刻を施し、内面のみに布目痕が残る。12-7は型打成形の大皿で、黄釉製品の色絵素地である。外面に花唐草文の陽刻を施し、内外面に布目痕が残る。12-5～7は胎土に白色を呈する三代土が使用され、これらは松江藩の御用品と考えられる。12-8は肥前磁器の皿である。型打成形の小皿で、口縁端部に口紅装飾を施し、内面に山水文を描く。九州陶磁編年V期（1820～1860年代）に相当する。12-9は陶器の秉獨である。外面に鉄釉を施し、脚部は無釉。12-10は陶器の土瓶の蓋である。上部外面のみに青地釉を施し、下部外面に糸切り痕をもつ。

12-11は陶器の鉢である。内外面に淡黒色の鉄釉を施す。体部は直線的に延びる。12-12・13は陶器の擂鉢である。いずれも赤褐色を呈する胎土で、内外面に鉄釉を施す。器壁はやや丸味をもって立ち上がり、スリ目は10条を1単位として上端を揃える。口縁端部を折り返して玉縁状におさめる。

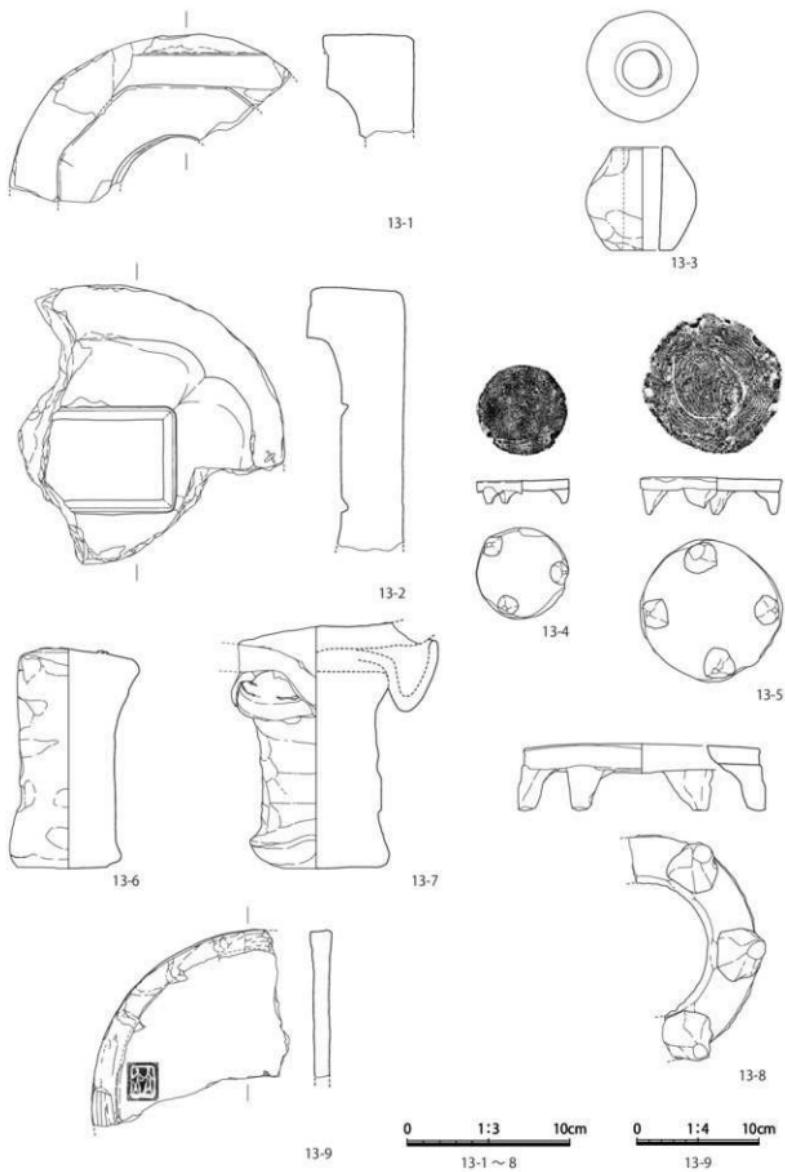
13-1～3は土製品である。13-1・2は皿の押型である。13-1は八角皿、13-2は輪花皿の押型である。いずれも押型の内外面に雲母（剥離剤）が付着し、布目痕が残る。13-2の押型の端部上面には「×」の印刻をもつ。これらは松江藩の御用品の押型と考えられ、13-2は輪花皿の素地（9-6）とセットになる押型である。13-3は土鍾である。橙褐色を呈する素焼品で、長さ6.4cm、最大幅6.8cmを測る。

13-4～9は窯道具である。13-4・5は足付トチンである。13-4は直径5.7cmで3足、13-5は直径8.8cmで4足である。13-6・7はトチンである。赤褐色～黒褐色を呈する鼓形トチンで、直径6.5～8.5cm、高さ13.5～15.1cmを測る。13-7は上部に溶けた甕片と陶器片が付着する。13-8は足付輪トチンで

ある。残存は2分の1程度で、上下面に回転糸切り痕をもつ。13-9は匣鉢の底部である。暗茶褐色を呈する匣鉢で、底部径は復元で27.2cmを測る。底部内面に窯記号と考えられる刻印をもつ。



第12図 素焼室・煙出出土遺物(1)陶器・磁器

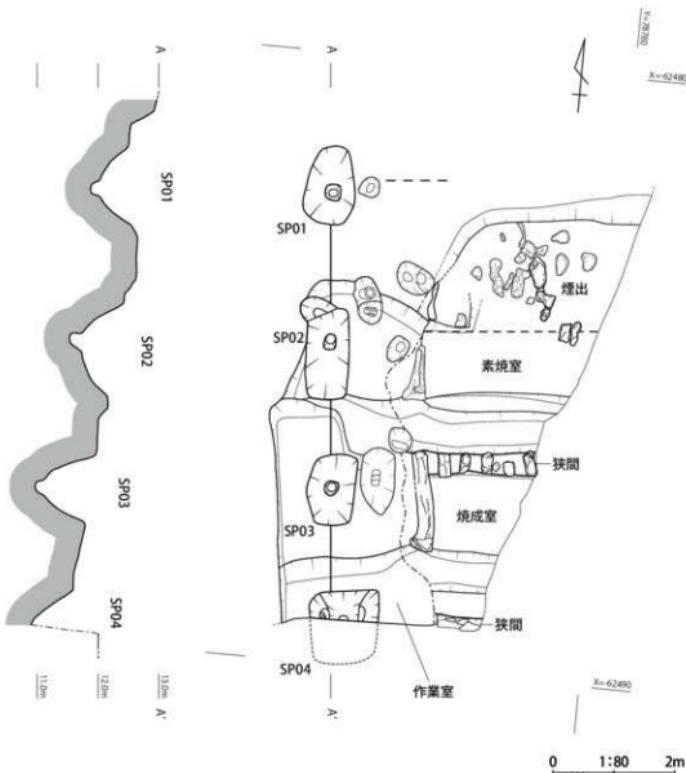


第13図 素焼室・煙出出土遺物(2)土製品・窯道具

第2項 柱穴列（第14図）

窯体西側の側壁に沿って検出した柱穴列により、覆屋の存在が想定される。柱穴列 SP01～04 は、標高 11.50～12.60m の緩斜面を階段状に加工した作業場と重複する位置で検出し、これらは窯体に付属する覆屋（掘立柱建物）の西側基礎部分と捉えている。規模は、桁行 3 間以上、梁行未検出の構造で、桁行 7.2m 以上を測る。柱間の心々距離は 2.4m の等距離である。主軸方位は南北で N-4°-W にとる。柱穴の平面形は橢円形を呈し、長軸 1.2～1.5m、短軸 70～80cm を測る。柱穴の深さは 65～85cm を測り、各柱穴内のほぼ中央で径 25cm の柱痕跡を確認した。

覆屋の基礎部分にあたる柱（柱穴）は、窯体の側壁から概ね 30cm 以下の近接する位置に構築されるのが一般的だが、今回検出した柱穴は、窯体の側壁から西側へ 1.4m 離れた位置に構築されている。このことは、窯体の西側に焼成室と素焼室の出入口（小口）が設けられているため、窯体からやや離れた位置に柱穴を構築することで、作業場の足場を確保するための配慮によるものと考えられる。

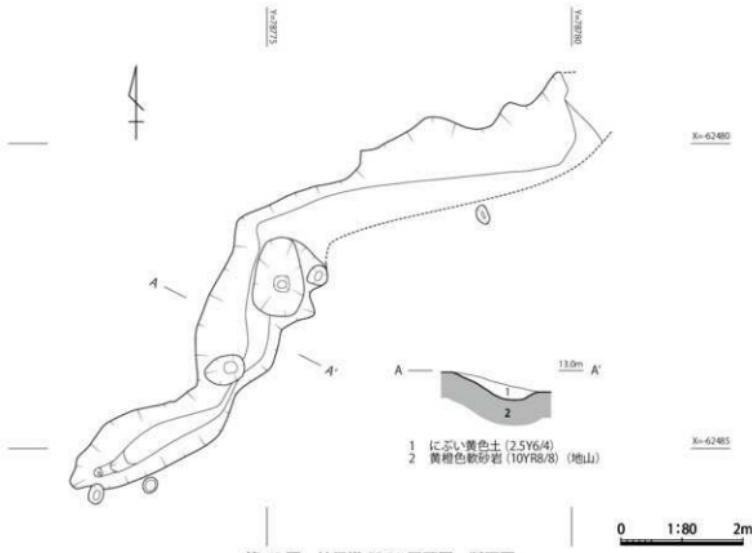


第14図 柱穴列 SP01～04（覆屋基礎）平面図・断面図

第3項 外周溝（第15図）

外周溝SD01は、窯尻周辺の後背部にあたる窯体の北西側に位置し、法面直下の標高12.30～12.70mの緩斜面で検出した溝である。規模は、長さ10.4m、幅1.0～1.3m、深さ20～30cmを測る。

平面形は窯体および窯場の外縁を囲うように配置されたものと考えられるが、溝の南側は途切れた状態で検出している。素掘の溝で、断面形は浅いU字状を呈する。溝底部は標高12.20～12.50mで、排水方向は北東から南西へ向かって下る。溝の埋土はにぶい黄色土の単層が堆積する。SD01から遺物は出土していない。遺構の性格は、窯場の排水のための外周溝と考えられるが、全体形は判然としていない。



第15図 外周溝SD01 平面図・断面図

第4節 物原（第16・17図）

物原は、調査区北側の丘陵斜面上に位置し、東西5.0m以上、南北7.5m以上の範囲でL字状に検出した。物原の範囲は、さらに調査区外の北東側へ広がるものと考えられる。物原の堆積土は、第17図に図示した土層図中の黒褐色土（第3層）が該当し、層厚は最大で80cmを測る。この黒褐色土は調査時に上層と下層に大別することができず、単層で堆積したものと捉えている。物原の下位に堆積する地山面は、標高12.64～15.36mで検出し、北西から南東方向に向かって傾斜をもつ。

物原から出土した遺物には、陶器は布志名焼の碗・皿・鉢・擂鉢・壺・甕などが出土し、焼き損じ品に加えて施釉前の素焼品が多く含まれていることが特徴的である。磁器は肥前磁器の広東碗の蓋（18-15）が1点出土しているが、登窯の焼成品ではなく、窯場で使用していた遺物が廃棄されたもの

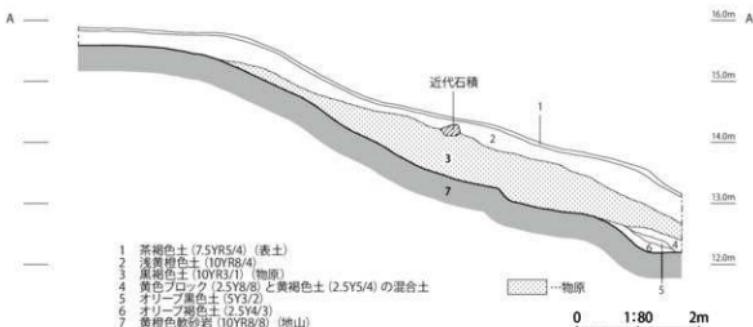
のと考えている。窯道具は足付トチン・足付輪トチン・丸トチン・トチン・丸ハマ・匣鉢・棚板などが出土している。

これらの物原から出土した遺物の中には、日用品である布志名焼の碗皿類以外に、松江藩の御用窯（土屋窯）を示唆する製品および窯道具が出土している点が注目される。御用品と考えられる遺物は、陶器は交趾焼の写し物の鉢（18-10）・織部焼の写し物の向付（18-11）・素焼品の花入（18-13）である。窯道具は円筒形の匣鉢（20-5）で、匣鉢の底部内面に「御」の刻書をもつ。この匣鉢は、焼成室から出土している匣鉢（11-11・12）と同様に、松江藩の御用品を焼成する際の窯道具と考えられる。

物原の年代は、出土した広東碗の蓋（18-15）を年代比定の指標とした場合、生産年代で19世紀前半（1820～1840年代）と考えられるが、染付文様の描き方や器壁が薄いという理由から在地の磁器窯である意東焼（1832～1844年頃）の製品の可能性もあるため、1820～1850年代のやや幅をもたせた年代を想定しておきたい。また、出土した錢貨（新寛永19-12・13）は、江戸時代後半の時期を補完するものと捉えることができる。



第16図 物原平面図



第17図 物原土層図

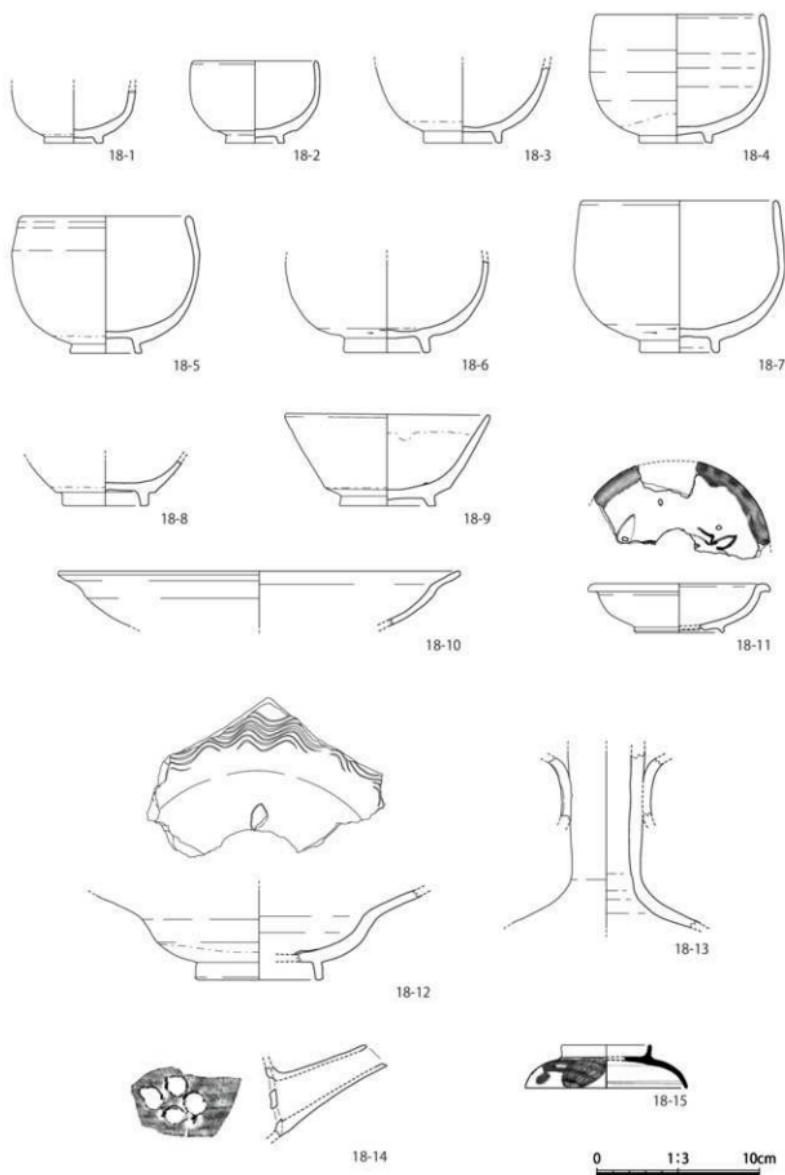
物原出土遺物（第18～20図）

ここでは物原の堆積土である黒褐色土（第17図第3層）から出土した遺物を掲載する。18-1～9は陶器の碗である。18-1～7は丸形碗で、18-3～7は布志名焼のいわゆる「ぼてぼて茶碗」である。18-1は内外面に長石釉を施し、高台は露胎。18-2は小振りの碗で、内外面に青地釉を施し、高台は露胎。18-3は内外面に灰釉を施し、高台は露胎。18-4は内外面に藁灰釉を施し、高台は露胎。18-5は内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。18-6・7は淡褐色～橙褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。18-8・9は朝顔形碗である。18-8は内外面に胎釉を施し、高台は露胎。18-9は内面に灰釉と青地釉の重ね掛け、外面に青地釉を施し、高台は露胎。

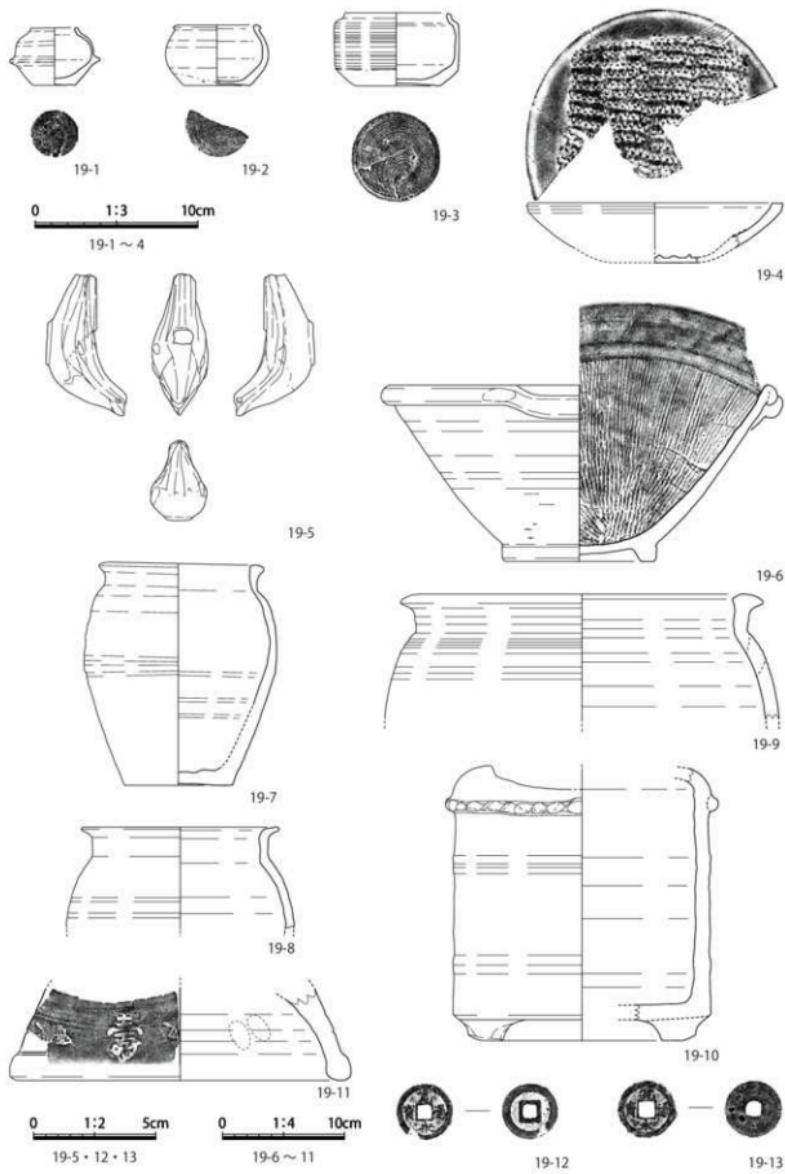
18-10・11は陶器の皿である。18-10は交趾焼の写し物の皿である。外面に斑に綠釉を施す。体部は僅かに丸味をもって上方へ向かい、口縁部付近で外傾させる。18-11は織部焼の写し物の向付である。外面に長石釉を施した後、口縁部周辺に綠釉の重ね掛けを施し、高台内は無釉。見込みに紅葉文を描く。18-10・11は胎土に白色～乳白色を呈する三代土が使用され、これらは松江藩の御用品と考えられる。18-12は陶器の鉢である。外面に灰釉を施し、高台は露胎。内面に線描きで波状文を施す。18-13は陶器の花生で、施釉前の素焼品である。頸部の両側に耳が付くものと考えられる。松江藩の御用品と考えられる。18-14は陶器の土瓶の注口である。内面に鉄釉、外面に青地釉を施す。18-15は肥前磁器の広東碗の蓋である。上部外面に宝尽くし文を描く。九州陶磁編年V期（1820～1840年代）に相当する。この蓋は染付文様の描き方や器壁が薄いという理由から、意東焼の可能性もある。19-1は陶器のミニチュアの釜、19-2・3は小壺である。外面に鉄釉を施し、胴部下方から底部は露胎。底部外面に糸切り痕をもつ。19-4は陶器の卸目皿である。外面に鉄釉を施し、底部は露胎。19-5は陶器の鳥形の笛である。外面に鉄釉と灰釉の掛け分けを施す。19-6は陶器の擂鉢である。白褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。器壁は直線的に立ち上がり、スリ目は8条を1単位として上端を揃える。口縁端部を折り返して玉縁状におさめ、高台端部を面取りする。

19-7・8は陶器の壺である。19-7は黄褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。胴丸形の壺で、口縁端部を平坦におさめる。19-8は外面に藁灰釉を施し、口縁端部を平坦にして外側に突出させる。19-9は陶器の壺である。橙褐色を呈する胎土で、施釉前の素焼品である。19-10は陶器の手焙りである。脚付の手焙りで、外面に鉄釉を施す。肩部に粘土紐で装飾を施す。19-11は陶器の五徳である。底部のみ残存し、外面に「寿」などの吉祥文の印刻を施す。19-12・13は錢貨である。いずれも寛永通寶で、18世紀後半以降に鋳造された新寛永である。

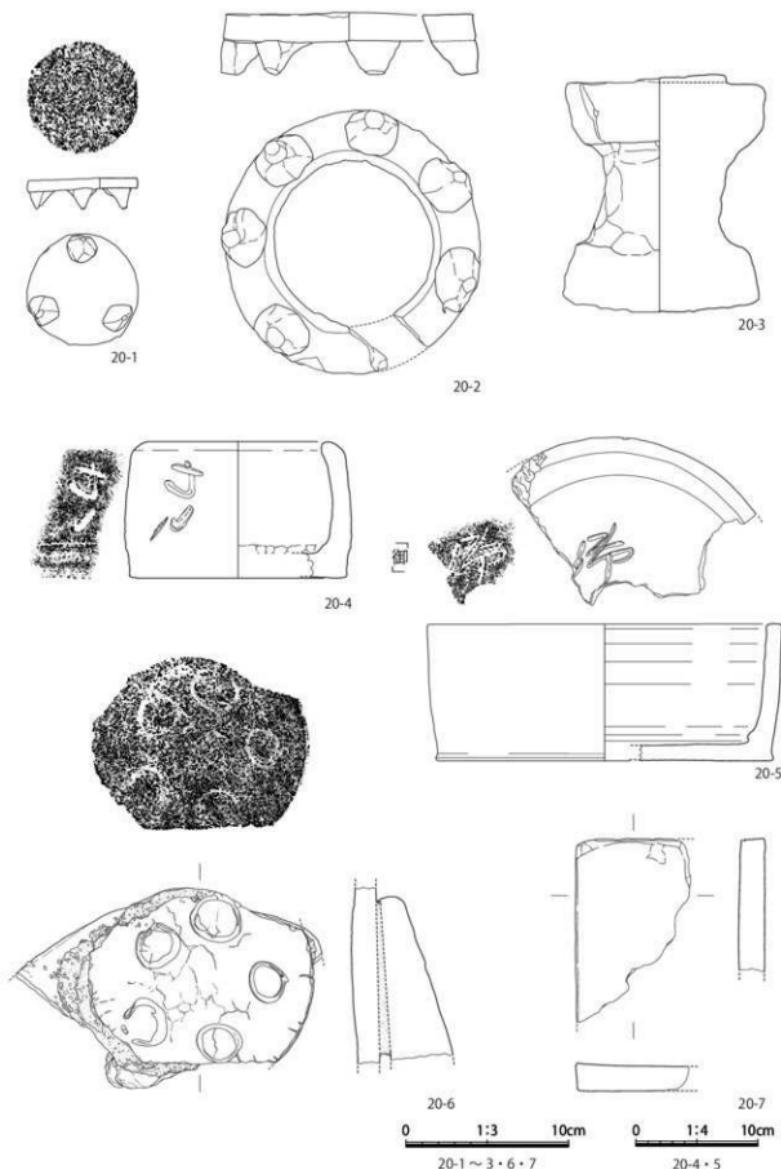
20-1～7は窯道具である。20-1は足付トチンで、直径6.8cmで3足である。20-2は足付輪トチンで、直径16cmで一部欠損するが7足と考えられる。20-3はトチンである。赤褐色を呈する鼓形トチンで、直径7.5～12cm、高さ14.6cmを測る。20-4・5は匣鉢である。20-4は茶褐色を呈し、口径15cm、器高11.2cmを測る。胴部外面に「か」の刻書を施す。20-5は黄灰色を呈し、口径28.7cm、器高11.2cmを測る。底部内面に「御」の刻書を施し、松江藩の御用品を焼成する際に用いられた匣鉢と考えられる。20-6は貝目積みに使用された焼台で、丸トチンと丸ハマである。丸トチンの上面に5箇所の貝目（ヤマトシジミ）が残る。20-7は棚板と考えられるが、瓦を転用した可能性もある。



第18図 物原出土遺物(1)陶器・磁器



第19図 物原出土遺物(2) 陶器・錢貨



第20図 物原出土遺物(3) 窯道具

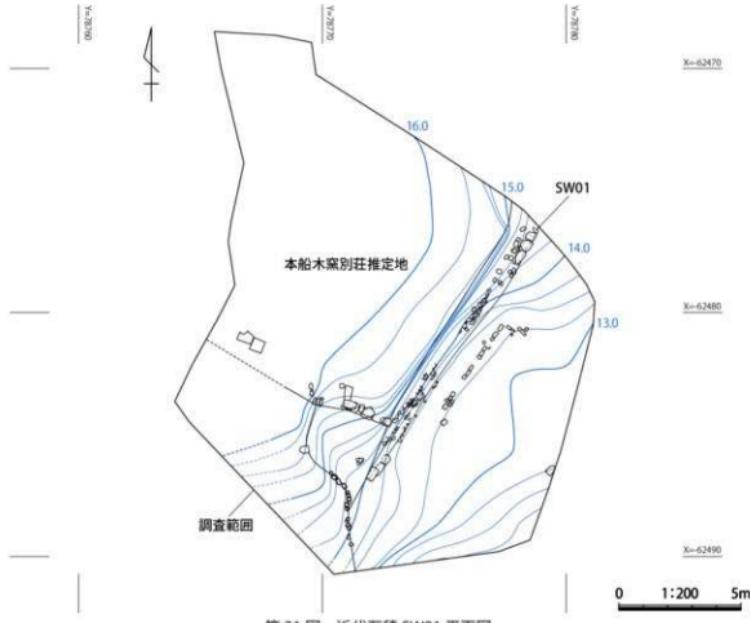
第5節 その他の遺構と遺物

第1項 近代石積（第21～23図）

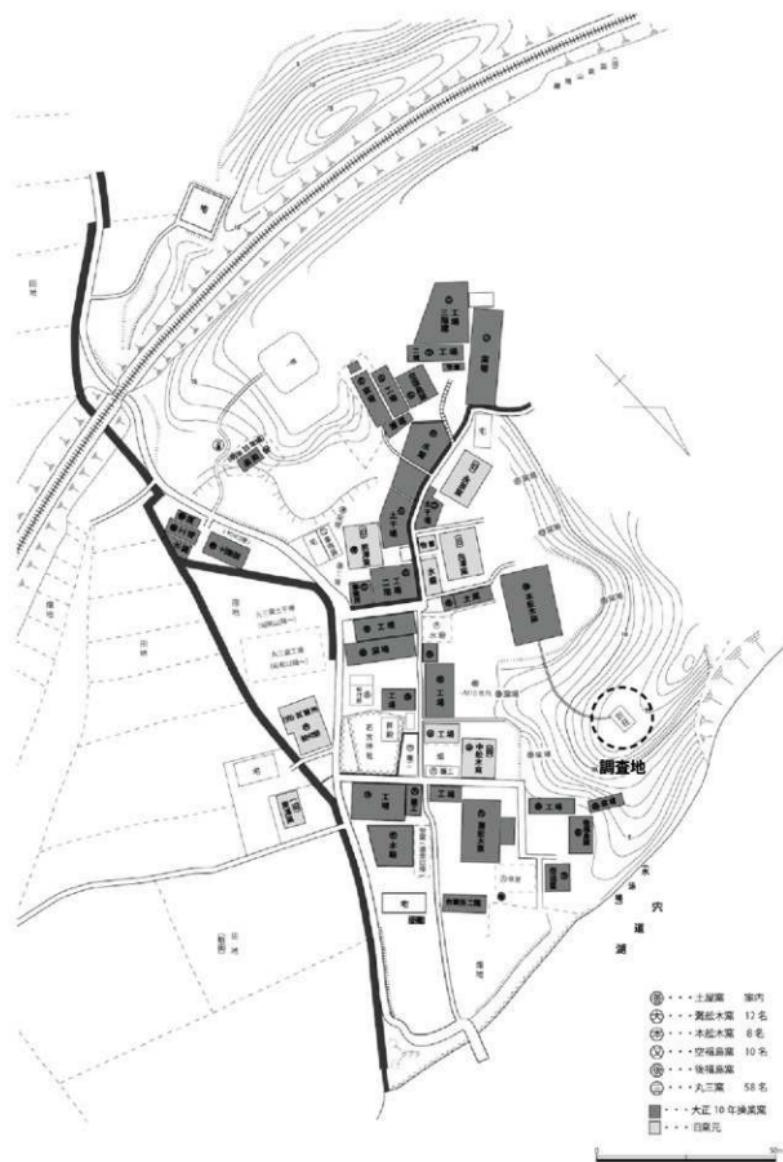
調査区内南東側の丘陵斜面で直角に削平された北東一南西方向の法面では、調査前の段階から来待石や煉瓦の石積を確認していた。表土掘削後に黄褐色を呈する造成土（第7図第10～12層）を検出し、この上面を精査しながら石積SW01の範囲を確認した。SW01の上端は標高14.50m、下端は標高13.50mで検出し、規模は東西4.0m以上、南北12.0m以上、高さ1.0～1.2mを測る。SW01から北西側の標高16.00mの丘陵頂部付近では東西7.0m、南北10.0mの範囲で平坦面を検出した。

第22図に図示した近代布志名推定復元図は、昭和53（1978）年に澤薫氏（向澤窯）が描かれた大正10（1921）年頃の布志名町割図を基に作成された推定復元図である。⁽¹³⁾ この復元図の中央右寄りにある「本船木窯」から約30m北側へ向かった丘陵上には「別荘」が描かれており、今回の調査で検出したSW01は、遺構の位置関係から本船木窯の別荘に伴う石積である可能性が極めて高い。

また、第23図に掲載した「山陰道商工便覧」は、明治20（1887）年に作成された銅版画で、この版画から明治時代の本船木窯の様子が窺える。大正10年頃の布志名町割図と比較すると、本船木窯の土蔵・工場・母屋などの建物配置は現地をほぼ反映しており、本船木窯の版画に見られる母屋の右上には、穴道湖畔の丘陵上に別荘が描かれている。これらの町割図や版画から、検出したSW01は本船木窯の別荘推定地に存在していた明治以降の近代の遺構として位置付けられる。



第21図 近代石積 SW01 平面図



第22図 近代布志名（若山周辺）推定復元図（阿部 2021）



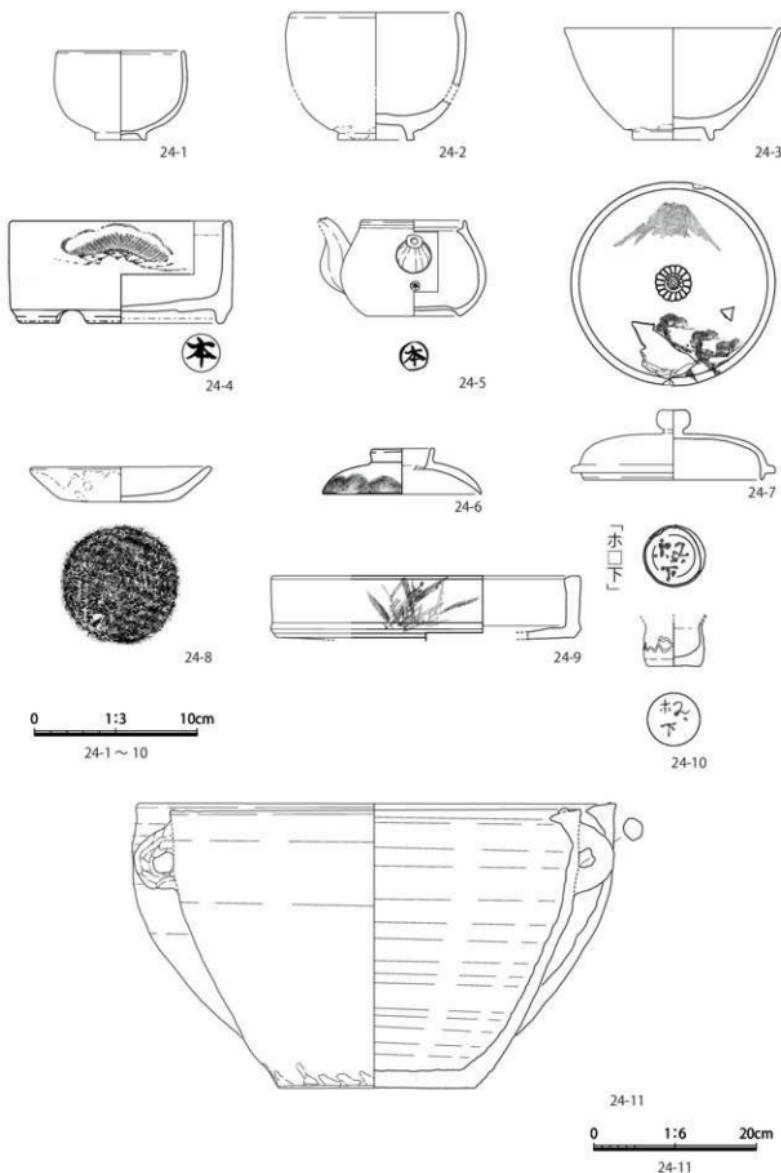
第23図 「山陰道商工便覽」本船木窯（松江歴史館所蔵）

第2項 黄褐色土出土遺物（第24・25図）

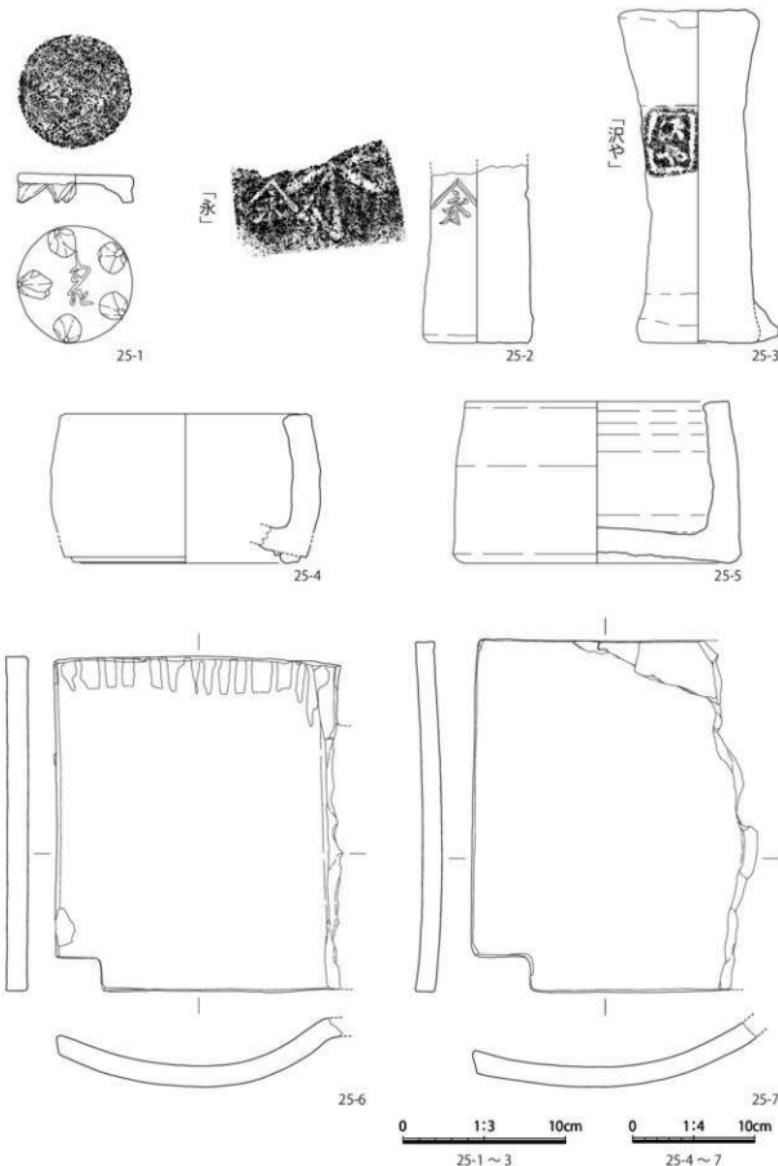
ここでは窯場の窯体廃絶後（解体後）に堆積した黄褐色土（第7図第10～12層）から出土した遺物を掲載する。第24・25図の掲載遺物は、黄褐色土の検出面および土層中から出土している。

24-1～3は陶器の碗である。24-1は小振りの丸形碗で、施釉前の素焼品である。24-2は丸形碗で内外面に灰釉を施し、高台は露胎。24-3は朝顔形碗で、内外面に鉄釉を施し、高台は露胎。24-4は陶器の蓋物の鉢である。胎土に三代土が使用され、内外面にやや橙色気味の黄釉を施す。胴部外面に松文を描き、口縁端部と置付は無釉。底部外面に「本」の窯印をもち、明治35年～大正頃の本船木窯の製品と考えられる。24-5は陶器の急須である。胎土に三代土が使用され、内面に黄釉、外面に黄釉と緑釉の掛け分けを施す。底部は無釉。胴部外面に「本」の窯印をもち、明治16～24年の本船木窯の製品と考えられる。24-6は陶器の端反碗の蓋である。胎土に三代土が使用され、上部外面に黄釉と緑釉の掛け分けを施す。明治16～24年の製品と考えられる。24-7は陶器の蓋である。胎土に三代土が使用され、内外面に黄釉を施す。上部外面に山・松文を描き、菊花形のつまみをもつ。明治35年～大正頃の製品と考えられる。24-8は陶器の灯明皿である。内面に鉄釉を施し、底部は無釉。24-9は半磁器の脚付鉢である。胎土に三代土と石見の白土の混合土が使用され、内外面に白濁釉を施す。胴部外面にコバルトで草文を描く。明治以降の製品で、灘船木窯の製品の可能性がある。24-10は陶器の色見である。底部内外面に「ホ□下」の墨書がある。24-11は陶器の大甕である。内外面に黒褐色の来待釉を施し、底部は無釉。平面形は橢円形を呈し、口縁部は平坦におさめる。

25-1～5は窯道具である。25-1は足付トチンで、直径6.9cmで5足である。下面中央に刻書をもつ。25-2・3は糸巻形トチンである。25-2は上部を欠損するが、外面に「永」の刻書をもつため、永原窯で使用されていたトチンと考えられる。25-3は外面3箇所に「沢や」の刻印をもつため、向澤窯で使用されていたトチンと考えられる。25-4・5は匣鉢である。暗褐色～赤褐色を呈する匣鉢で、口径19.6cm、器高12.3～13.3cmを測る。25-6・7は模瓦である。いずれも凸面を欠損する。25-6は凹面の尻側を除き、暗赤褐色の来待釉を施す。25-7は器面が銀化し、微量のキラコが付着している。



第24図 黄褐色土出土遺物（1）陶器・半磁器



第25図 黄褐色土出土遺物(2) 窯道具・瓦

註

- (1) 連房式登窯は、丘陵地などの斜面を利用して下方から上方に向かって階段状に築かれた窯である。火を焚く燃焼室と製品を焼く焼成室からなり、燃焼室と焼成室はともに独立した部屋となっている。各室を仕切る壁には「通焰孔」と呼ばれる穴が多数開けられ、その通焰孔を通って炎や熱が各焼成室全体に行きわたる構造となっている。
- (2) 窯体側面に設けられる小口は、焼成品の搬入出や燃料となる薪を投入して追い焚きをする際に使用する場所である。窯体の片側に小口を設けるのが一般的な窯構造で、大抵は窯体各室に付属する。窯焚時には粘土や煉瓦などで塞がれる。
- (3) 作業場は、窯体各室の小口側に付属するもので、窯詰めや窯出しの際に焼成品を積み上げたり、窯焚時に使用する薪を置いておくための作業スペースとして使う場所である。
- (4) 窯体各室を連結する狭間（通焰孔）は、燃焼室と各焼成室の間に通焰孔を設けることにより、炎を勢い良く焼成室内に吹き出させることによって、炎を上下または左右に分けて焼成室全体に熱を行きわらせる機能をもつ。
- (5) 島根県埋蔵文化財調査センター阿部賀治氏の御教示による。今回検出した窯跡は窯体上方に位置する焼成室・素焼室の2室が遺存し、最上部は煙出である。出雲地域では、煙出のことを「あだやき」とも呼ぶ。
- (6) 窯体内に設けられる焚底は、小口から薪を投入して追い焚きをする場所である。また、小口から入って焼成品の搬入出をするための作業通路でもある。平面形は溝状を呈する。
- (7) 布志名焼雲雀窯九代土屋幹雄氏の御教示による。土屋氏からは「登窯は修繕や補強を繰り返しながら使うもので、布志名地区にも窯造り専門の職人がいた。専門の職人は百姓と兼業で生計を立てていた。」との御教示をいただいた。
- (8) 窯体内に設けられる正座は、焼成品を窯詰める場所全体のことである。砂床は基本的には正座に敷き詰められる。
- (9) ぼてぼて茶碗は、内外面に青地釉・黒釉・呉須釉・黄釉などが施釉される半球状の丸形碗である。ぼてぼて茶は、この茶碗に茶の花と番茶を入れて専用の茶筅で泡立て、その中に煮しめや冷飯などを入れて混ぜて飲むという。江戸時代後半頃から出雲地方にあった庶民の風習である。
- (10) ここでの御用品は、松江藩の御用方（御用所）から御用窯が注文を受けて作陶および焼成した製品のことである。今回出土した匣鉢には、胴部外面や底部内面に「御用」の刻書をもつものを4点確認しており、これらは御用品を専門で焼成する際に使用された匣鉢と考えられる。なお、匣鉢に製品を入れて焼成することの効用は製品の質の向上である。匣鉢に製品を入れて窯詰めすれば、窯体内部の煤や灰による傷や汚れを避けることができる。また、直接炎が製品にあたらないので、焼きムラが生じたり割れてしまうことを防ぐことができる。江戸時代の御用窯のコンセプトは商品生産ではなく、藩主のお好み物や茶道具・藩士の茶道具や座敷で使用する器・他藩および大名への献上品や贈答品などの作陶であり、これらはコストに関係なく高級品の生産が求められていたということが考えられる。
- (11) 交趾焼は、中国福建省南部の漳州で生産された焼物である。三彩、法花、黄南京なども広義には交趾焼である。
- (12) 三代土は、雲南省昆明市官渡区で生産される白色～乳白色を呈する陶土で、三種類の土を単独または混合して用いている。この陶土は、きめが細かく、膨らみが強いため、型物や細工物に適した土とされている。
- (13) 第22図の近代布志名推定復元図は、島根県埋蔵文化財調査センターの阿部賀治氏が作成され、本報告にあたって図面データのご提供をいただいた。この図面は阿部氏の論考「近代における布志名の町割復元について」に掲載されており、出典は『近代国際陶磁研究会 2021 近代陶磁第22号』である。
- (14) 色見は、窯詰め後の製品の焼成時に使用する窯業用炉内温度測定用具である。現代ではゼーガル錐を使用する。また、釉薬の溶け具合を見るためのものもあり、施釉した陶器片を窯内に入れてサンプルとして用いる場合もある。

第5章 総括

山林崖崩れ対策工事に先立ち、試掘調査および本発掘調査を実施した。調査の結果、当窯跡は若山の丘陵東側に所在する連房式登窯であることを確認した。本章ではこれらの調査成果に基づき、第1節では布志名焼窯跡の窯元と年代について整理し、第2節では松江藩御用窯（土屋窯）における布志名焼の特徴について述べる。いずれも布志名焼の歴史的背景や系譜について検討を含めながら、若干の考察を加えることでまとめたい。

第1節 布志名焼窯跡の窯元と年代（第26図）

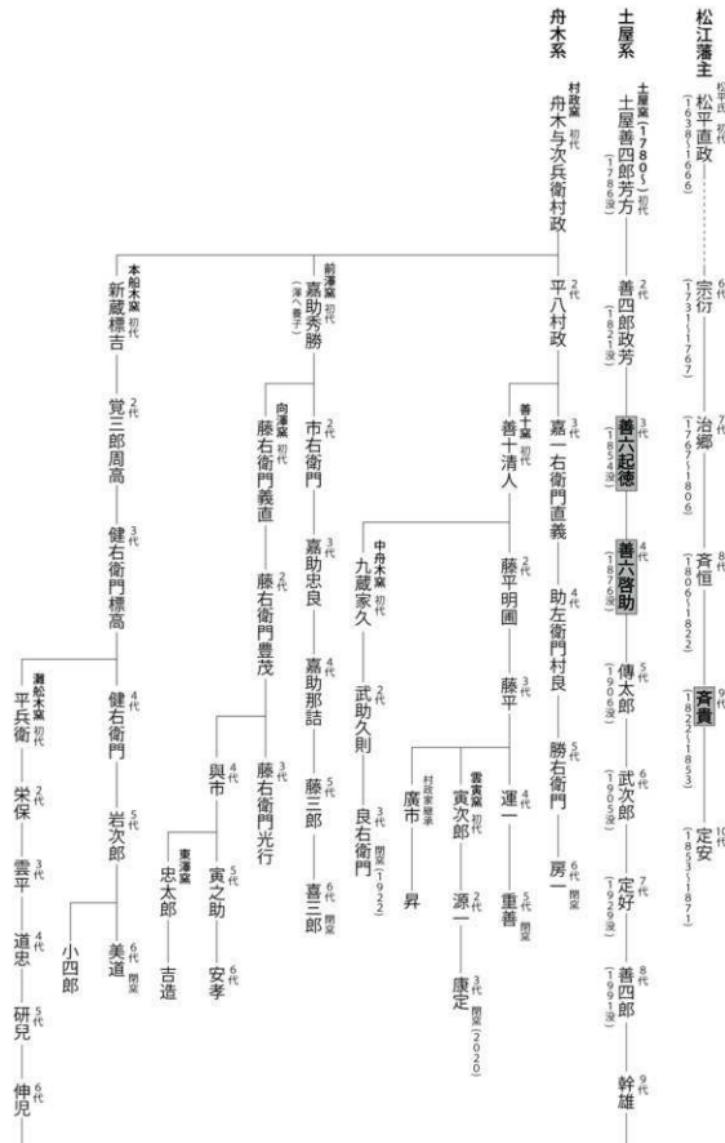
今回の調査で検出した窯跡は、窯体上方を構成する焼成室・素焼室・煙出からなる連房式登窯の一部と覆屋に伴う柱穴列の一部が遺存し、窯体北側の丘陵斜面上では物原を確認した。遺物は、焼成室および素焼室内に堆積する焼土と砂床・煙出内の焼土・物原・窯体を覆う黄褐色土から出土した。窯跡の年代は、焼成室・素焼室・煙出・物原の出土遺物から1830～1850年代が主体となるものと考えられ、窯体内と物原から松江藩御用窯に関わる御用品や窯道具が出土している点が注目される。

布志名焼の御用窯には「土屋窯」と「永原窯」の2窯があり、このうち永原窯は若山の丘陵南側に窯場が存在していたことが知られている（第3図）。そのため、検出した窯跡は、若山の丘陵東側に位置する土屋窯に比定するものと考えている。土屋窯は、18世紀後半の安永9（1780）年に布志名で開窯し、布志名地区内において現在までに3～4回移転しながら操業していたと伝えられている⁽¹⁵⁾。今回の調査によって19世紀前半（1830～1850年代）の土屋窯は、若山の丘陵東側で登窯を操業していたことが明らかとなった。

松江藩主と土屋系の系譜は第26図に図示したように、当該期の松江藩主は松平氏9代斉貴^{なりたけ}で、土屋窯は3代土屋善六起徳～4代善六啓介の時期に該当するものと考えられる。布志名焼の御用窯は、松江藩御用方（御用所）の命を受け、松平氏7代治郷以降、代々藩主のお好み物や高麗・青磁・南蛮・織部・瀬戸などの様々な写し物を焼成し、藩の庇護のもとに明治維新まで作陶を続けたとされる。

そして、窯体内に堆積する焼土を覆う黄褐色土は、登窯が廃絶（解体）した後の堆積層と捉えている。この黄褐色土から出土した遺物には、黄釉を施した鉢（24-4）や急須（24-5）に「奉」の窯印をもつものが含まれ、これらは近代（明治10年代～大正頃）の本船木窯の製品と考えられる。また、明治以降の布志名焼窯については、明治10（1877）年に布志名焼諸窯が合同して若山陶器会社を設立し、その後は製陶社・黄陶社・舟木合名会社・丸三陶器商会と離合を繰り返し、海外にも販路を広げるようになる。この他にも、灘船木窯の製品の可能性がある半磁器の鉢（24-9）、永原窯や向澤窯の窯道具であるトチン（25-2・3）があり、他の窯場の製品や窯道具の移動が認められる。このことは土屋窯が移転した後に、若山の丘陵東側付近に共同窯が存在していたことを示唆している。

以上の検討から、当窯跡における窯元の変遷は、19世紀前半（1830～1850年代）に松江藩御用窯の土屋窯が操業し、その後の19世紀後半～20世紀初頭（明治10年代～大正頃）に民窯の本船木窯（共同窯）が操業していた可能性は高いものと想定している。



第26図 松江藩主・土屋系・舟木系の系譜

第2節 松江藩御用窯（土屋窯）における布志名焼の特徴（第27図）

ここでは今回の調査で出土した松江藩御用窯（土屋窯）における陶器・押型・窯道具について整理し、19世紀前半（1830～1850年代）を中心とした布志名焼の特徴についてまとめておきたい。

当該期の御用窯である土屋窯に関わる遺物は、松江藩御用窯関連出土遺物として第27図に掲載した。遺物について詳細を述べると、陶器は輪花皿の素地（9-6）・黄釉皿の色絵素地（12-6・7）・交趾写の緑釉四方皿（12-5）・交趾写の緑釉皿（18-10）・織部写の向付（18-11）・素焼品の花生（18-13）の7点があり、これらは胎土が精緻で釉薬の使用が日用品とは異なるもので一般向けの製品ではないことが考えられる。陶器を成形する際に使用された押型は八角皿の押型（13-1）・輪花皿の押型（13-2）の2点がある。窯道具は胴部側面に「御用」の刻書をもつ匣鉢（11-10）・底部内面に「御」の刻書をもつ匣鉢（11-11・20-5）・底部内面に「用」の刻書をもつ匣鉢（11-12）の4点があり、これらは御用品を焼成する際に使用された匣鉢と考えられ、御用窯の存在を如実に示す遺物である。

御用品の陶器に用いられている陶土は、雲南市加茂町三代で産出される白色～乳白色を呈する三代土を主土としている。この陶土は「御留土」といわれるもので、松江藩御用窯（楽山焼・布志名焼）⁽¹⁶⁾でしか用いることができなかった陶土とされ、日用品に用いられる灰色～赤褐色を呈する陶土とは土質や成分が異なるという特徴をもつ。

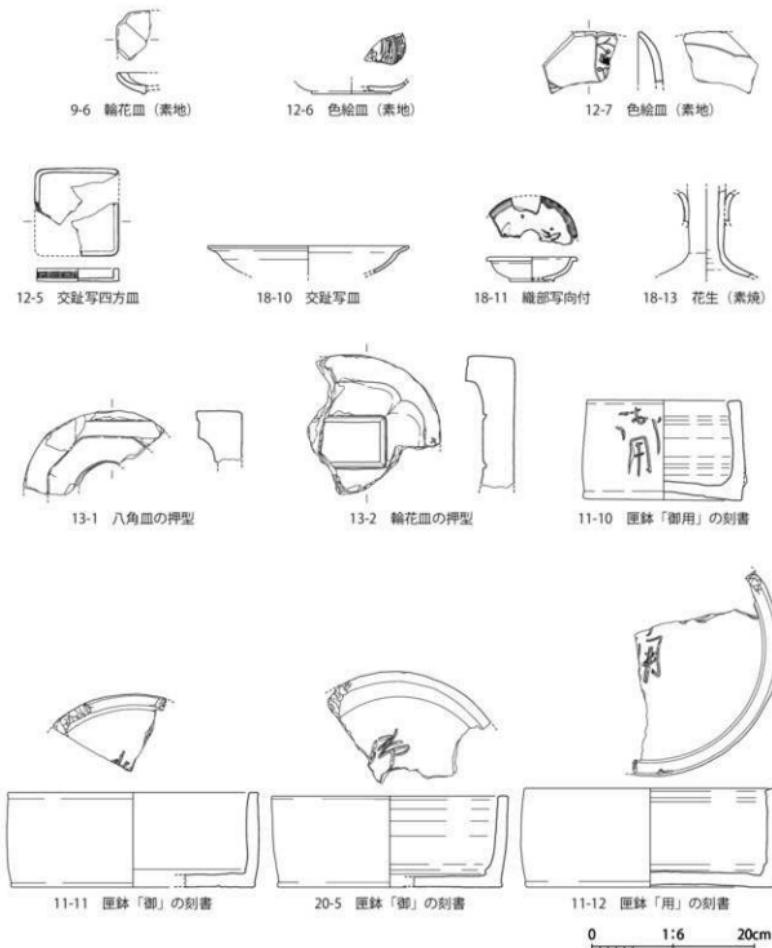
特筆すべき点として、今回出土した窯道具に窯詰め技法のひとつである「貝目積み」の痕跡が見られる点を挙げておきたい。貝目積みとは朝鮮系の窯詰め技法で、目としてアサリ・サルボウ・ヤマトシジミなどの二枚貝の貝殻を用いる。日本国内では、唐津焼（佐賀）・高取焼（福岡）・萩焼（山口）などで確認されている窯詰め技法のひとつである。主として壺・甕・鉢などの大形品に用いられる技法だが、萩焼古窯群（松本窯・深川窯）では皿や擂鉢にも用いられている。布志名焼の系譜を考えた場合、これまでの陶磁器研究において「朝鮮陶技を伝承する山口の萩焼を源流として、出雲の楽山焼から布志名焼へと萩焼の技術が伝承される」という系譜が指摘されており、萩焼の窯詰め技法である貝目積みは、まず楽山焼に取り入れられ、そこから布志名焼へと伝播した技術であることは十分に推察されるところである。また、布志名焼の陶器生産は、布志名焼の開祖である舟木と次兵衛村政が萩焼の陶工を雇って始めたと伝えられ、萩焼と初期の布志名焼を比較すると「秋白」といわれる藁灰釉の使用や半球碗といった器形などに共通する部分が認められる。このように、窯詰め技法や釉薬の使用など特徴から、布志名焼の源流は萩焼の陶工による技術の伝播にあるものと考えられ、今回出土した窯道具に見られる貝目積みの痕跡がそのことを裏付けている。

次に、今回の調査で一定量の出土を確認することができた19世紀前半（1830～1850年代）の布志名焼の日用品である陶器の碗と擂鉢の特徴について述べておきたい。当該期の碗は、「高台が露胎で、高台端部の面取りをしない」という特徴をもつ。碗の施釉は、内外面に藁灰釉・灰釉・鉄釉・長石釉・飴釉・青地釉などが施され、バリエーションが多い。この他、灰釉と青地釉の重ね掛けが施された碗も確認している。今回の調査では、窯体内および物原から内外面に黄釉が施された碗の出土を確認していないため、黄釉の碗はこれらの時期よりも後出するという点が指摘できる。一方で、石見焼の碗は、高台端部の面取りをするものが多く見られるため、今後は高台端部の面取りの有無によっ

て布志名焼と石見焼の碗を判別する際のひとつの指標となるであろう。

当該期の布志名焼の擂鉢は、「胎土が赤褐色～橙褐色を呈し、スリ目単位は概ね8～10条を1単位として上端を揃え、口縁端部を折り返して玉縁状におさめる」という特徴をもつ。高台端部の面取りをするものとしないものが混在する。擂鉢の施釉は、内外面に鉄釉または来待釉が施されている。

以上の検討から、布志名焼の松江藩御用窯（土屋窯）については「御用品を焼成しながら、日用品も焼成していた」ということを考古学的な知見から指摘しておきたい。



第27図 松江藩御用窯（土屋窯）関連出土遺物

第3節 結語

以上のように、布志名焼窯跡群の調査成果と出土遺物の様相について概観してきた。これらの成果を踏まえ、当窯跡が立地する宍道湖南東岸の若山の丘陵東側には、江戸時代後半の土屋窯（19世紀前半）および近代の本船木窯（19世紀後半～20世紀初頭）の2窯が存在していたことが想定される。

今回の調査では、遺構の遺存状況から連房式登窯の全体形は明らかとし得なかったが、布志名焼の松江藩御用窯である土屋窯の1830～1850年代に比定される遺構と遺物などの資料が得られたことが大きな調査成果となった。既往の調査や文献等で検証がなされてきた百年来続く出雲焼研究において、これまでにその実態が解明されていなかった布志名焼の御用窯の検出は、そこで焼成されていた御用品・日用品・窯詰めの際に用いられた窯道具などの出土資料によって、新たな知見が得られたものと評価ができる。

今回出土した布志名焼の窯資料は、今後の段階で陶磁史・美術史・産業史を含め、これらの相互関係を踏まえながら総合的に検討していくことが求められ、出雲焼研究においても極めて重要な意義をもたらすものと考えられる。そして、布志名地域における布志名焼の調査・研究がさらに進展することによって、当地域の歴史がより具体的に解明されていくことを期待したい。

註

- (15) 布志名焼雲善窯九代土屋幹雄氏の御教示による。
- (16) 布志名焼の御用窯に用いられる陶土は、18世紀後半には出雲市今市町・松江市鹿島町手筋で産出される「赤土」を使用していた。19世紀前半には松江市八雲町西岩坂・松江市東出雲町下意東・雲南市加茂町三代で産出される「白土」を使用し、明治中頃以降から、島根県西部の石見土や松江市古志原の古志原土を多用するようになった。日用品に用いられる陶土は、松江市玉湯町湯町の報恩寺土を使用していた。なお、松江藩では藩の奨励策として、1833年に肥前磁器をはじめとする陶磁器の輸入を禁止するなどして藩内で陶磁器を管理するために磁器窯である意東焼を藩営（藩窯）としている。しかし、この磁器窯の操業は軌道に乗ることができず、1844年に廃窯となる。
- (17) 貝目積みは、萩焼初期の坂古窯群や深川古窯群の出土資料に多く見られる特徴的な窯詰め技法のひとつである。これまでの陶磁器研究において、貝目があれば17世紀代の製品とされていたこともあったが、近年では18～19世紀代の製品にも貝目をもつ資料が確認されているため、現在はこのような見方は成り立たないものと考えられる。
- (18) 布志名焼の系譜は、1980年代の陶磁器研究において既に指摘されているように、栗山焼を萩焼の分流とする陶技術の系譜上の位置付けがあり、その系譜に統く布志名焼へと技術が伝播している。今回の調査で出土した遺物は、考古学的な知見からその裏付けとなる窯資料が得られたものと考えている。

参考文献

- 河野良輔 1989 『日本陶磁大系 第14巻 萩・出雲』 平凡社
 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
 島根県教育委員会 1985 『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ 窯業関係遺跡』
 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2016 『在地陶磁器集成Ⅰ (石見部 陶器編)』
 松江市史編纂委員会 2020 『松江市史 通史編4 近世Ⅱ』
 山口県教育委員会 1986 『萩焼 長門深川古窯』

遺物觀察表

陶器・磁器（1）

※法量のカッコ書きの数値は、復元または残存法量を示す。

遺物 番号	通構名	種類	器種・部位	法量（cm）			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径	底径	高さ	調整・手法	施土・焼成		
9-1	燒成室	陶器	丸形碗	—	4.1	(2.6)	外 内 灰釉	施土 焼成	青灰色 内 青灰色	足込みにトントンの印跡。 高台は露胎。
9-2	燒成室	陶器	丸形碗	—	4.7	(5.6)	外 内 高灰釉 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。
9-3	燒成室	陶器	丸形碗	—	4.4	(4.3)	外 内 高灰釉 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。
9-4	燒成室	陶器	丸形碗	—	4.9	(4.2)	外 内 高灰釉 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。 高台は露胎。
9-5	燒成室	陶器	丸形碗	—	4.9	(4.2)	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。 施釉前の素焼品。
9-6	燒成室	陶器	輪花皿	—	—	2.6	外 内 青白釉 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	御用品。 型#13-2とセットの素地。
9-7	燒成室	陶器	小盤	5.2	2.8	4.5	外 内 出船	施土 焼成	青白色 内 青白色	底部外面に糸切り線。
9-8	燒成室	陶器	小盤	(8.3)	(5.3)	6.5	外 内 灰地輪 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	底部外面に糸切り線。
9-10	燒成室	陶器	鉢	17.5	5.2	10.0	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	施釉前の素品。
9-11	燒成室	陶器	鉢	(25.9)	—	(11.9)	外 内 鉢輪 鉢輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
10-1	燒成室	陶器	鉢	—	(12.0)	(9.1)	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	施釉前の素焼品。
10-2	燒成室	陶器	片口	(27.0)	—	(8.3)	外 内 平滑輪（灰釉） 平滑輪（灰釉）	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
10-3	燒成室	陶器	擂鉢	—	6.8	(3.0)	内 外 透明磨 ヌリ目付 8条	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼ込みと底部外面に印跡。 無高行で底。
10-4	燒成室	陶器	擂鉢	(33.3)	—	(9.0)	スリ目付 8条	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
10-5	燒成室	陶器	擂鉢	(33.1)	(11.5)	14.5	スリ目付 8条	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
10-6	燒成室	陶器	瓶	(14.8)	9.4	(19.3)	外 内 回向ナデ。美濃 回向ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	施釉前の素焼品。
10-7	燒成室	陶器	瓶	—	9.5	(7.9)	外 内 回向ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	施釉前の素焼品。
10-8	燒成室	陶器	甕	(28.4)	—	(7.0)	外 内 回向ナデ。美濃文 美濃文	施土 焼成	青白色 内 青白色	絞りにガタガタの軸土。 施釉前の素焼品。
10-9	燒成室	陶器	甕	(23.6)	—	(10.0)	外 内 灰地輪。灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部に花びらの開裂。 焼ききみなり。
10-10	燒成室	陶器	甕	—	(19.8)	(9.0)	外 内 回向ナデ。稻子タキ 稻子タキ	施土 焼成	青白色 内 青白色	底部内部のみ格子タキを施す。 焼ききみなり。
12-1	素燒室・埋出	陶器	丸形碗	—	(3.3)	(2.2)	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。
12-2	素燒室・埋出	陶器	丸形碗	—	(5.0)	(4.7)	外 内 高灰釉。灰地輪 高灰釉。灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。 高台は露胎。
12-3	素燒室・埋出	陶器	丸形碗	(8.5)	(4.5)	9.4	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶系。 施釉前の素焼品。
12-4	素燒室・埋出	陶器	端反碗	(12.0)	(4.5)	5.6	内 外 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	高台は露胎。
12-5	素燒室・埋出	陶器	四方瓶 （交趾写）	(9.8)	(10.2)	1.8	内 外 縫合。縫合 縫合	施土 焼成	青白色 内 青白色	御用品。 縫合部に妙手付着。
12-6	素燒室・埋出	陶器	瓶 （印加素地）	—	(9.5)	(1.5)	内 外 格子文と草花文の割離	施土 焼成	青白色 内 青白色	御用品の素地。布口直あり。
12-7	素燒室・埋出	陶器	瓶 （印加素地）	—	(3.0)	内 外 花唐草文の割離	施土 焼成	青白色 内 青白色	白色 九州陶磁研究会年刊 （1820～1860年代）	
12-8	素燒室・埋出	陶器	瓶	(10.5)	—	(1.7)	内 外 口口。山水文 山水文	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部は無軸。
12-9	素燒室・埋出	陶器	束縛	5.8	4.2	5.5	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	下部外面に糸切り線。
12-10	素燒室・埋出	陶器	瓶	(7.7)	6.0	1.9	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	下部外面に糸切り線。
12-11	素燒室・埋出	陶器	深鉢	(20.0)	—	(7.5)	外 内 鉢輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	云善黒の可能性あり。
12-12	素燒室・埋出	陶器	擂鉢	(29.2)	(10.2)	13.2	内 外 灰地輪 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
12-13	素燒室・埋出	陶器	擂鉢	(27.8)	(11.7)	16.3	内 外 灰地輪 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部を玉縁状におさめる。
18-1	物原	陶器	丸形碗	—	3.5	(3.3)	外 内 長行輪 長行輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	小振りのぼてぼて茶碗。 高台は露胎。
18-2	物原	陶器	丸形碗	(7.4)	(3.4)	5.1	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	小振りのぼてぼて茶碗。 高台は露胎。
18-3	物原	陶器	丸形碗	—	(4.6)	(4.7)	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。
18-4	物原	陶器	丸形碗	10.1	4.4	7.9	外 内 高灰釉 高灰釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。 高台は露胎。
18-5	物原	陶器	丸形碗	(10.2)	4.3	8.4	外 内 鉢輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。 高台は露胎。
18-6	物原	陶器	丸形碗	—	5.1	(5.7)	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。 施釉前の素焼品。
18-7	物原	陶器	丸形碗	11.8	4.7	9.3	外 内 ケズリ。ナデ ナデ	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。 施釉前の素焼品。
18-8	物原	陶器	朝彌形碗	—	(5.1)	(2.8)	外 内 鉢輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	ぼてぼて茶碗。 高台は露胎。
18-9	物原	陶器	朝彌形碗	12.4	5.8	5.7	外 内 青白釉 青白釉 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	高台は露胎。
18-10	物原	陶器	（交趾写）	(24.5)	—	(3.4)	外 内 鉢輪 鉢輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	御用品。
18-11	物原	陶器	鉢 （横写）	(10.5)	(5.3)	3.0	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	青白色 体部下方から高台は無軸。
18-12	物原	陶器	花生	—	(7.6)	(5.5)	外 内 灰地輪	施土 焼成	青白色 内 青白色	御用品。
18-13	物原	陶器	土瓶	—	—	(10.9)	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁部に把手が付く。
18-14	物原	陶器	土瓶	—	—	(4.5)	外 内 青白釉 青白釉	施土 焼成	青白色 内 青白色	口縁のみ残存。

陶器・磁器（2）

遺物 番号	遺構名	種類	器種・部位 口径 底径 備考	法量 (cm)		調査・文様の特徴			色調	備考	
				口徑	底径	高さ	調査・手法	胎土・焼成			
18-15	物原	磁器	蓋 (10.2)	—	2.7	外 宝鏡くし文	胎土 黒 良好	外 白色	九州鹿児島府年V期 (1820～1840年代)		
19-1	物原	陶器	ミニチュア	2.8	2.7	3.5	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	外 赤褐色	ミニチュアの蓋。 底部外面に系切り縫。	
19-2	物原	陶器	小蓋 (4.6)	(4.0)	3.7	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	内 赤褐色	底部外面に系切り縫。		
19-3	物原	陶器	小蓋	6.3	5.1	4.5	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	内 赤褐色	底部外面に系切り縫。	
19-4	物原	陶器	鉢口蓋 (15.5)	—	(2.7)	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	外 水褐色	内面に鉢口。		
19-5	物原	陶器	蓋 (鳥形)	5.8	2.3	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	外 茶褐色	上部中央に空気孔をもつ。		
19-6	物原	陶器	擂鉢 (31.0)	12.2	14.5	スリ目目付 8条	胎土 黒 良好	外 茶褐色	上部底面を斜状にわざめる。 内面に茶褐色。		
19-7	物原	陶器	蓋	12.0	8.8	18.3	外 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	内 茶褐色	調査前の未精品。	
19-8	物原	陶器	蓋	(16.5)	—	(8.4)	外 内 焼成 外 花輪	胎土 黒 良好	内 绿褐色	上部底面を平端におさめる。	
19-9	物原	陶器	蓋 (26.5)	—	(10.3)	外 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 茶褐色	調査前の未精品。		
19-10	物原	陶器	手鉢り	—	(21.2)	(22.3)	外 花輪	胎土 黒 良好	外 茶褐色	画面に粘土紐の装飾。	
19-11	物原	陶器	五徳	—	(27.0)	(7.5)	外 吉祥文の印刷	胎土 黒 良好	外 茶褐色	底盤のみ残存。	
24-1	黄褐色土	陶器	丸形罐	7.7	3.0	5.5	外 ケツリ、ナデ	胎土 黒 良好	外 茶褐色	小振りの丸びて茶碗。	
24-2	黄褐色土	陶器	丸形罐	(10.2)	(4.6)	(7.9)	外 花輪	胎土 黒 良好	内 茶褐色	調査前の未精品。	
24-3	黄褐色土	陶器	削形瓶	(13.2)	(4.8)	6.9	外 花輪	胎土 黒 良好	内 茶褐色	底面は圓滑。	
24-4	黄褐色土	陶器	鉢	13.5	12.4	6.3	外 花輪	胎土 黒 良好	外 茶褐色	前部外面に本廟木堂の印伝あり。	
24-5	黄褐色土	陶器	急須	6.3	5.8	5.9	外 花輪、縫跡	胎土 黒 良好	外 茶褐色	調査前に本廟木堂の印伝あり。	
24-6	黄褐色土	陶器	蓋	9.6	—	2.8	外 花輪、縫跡	胎土 黒 良好	外 茶褐色	調査 16～24年の製品。	
24-7	黄褐色土	陶器	蓋	10.9	—	4.2	外 花輪、山・松文	胎土 黒 良好	内 茶褐色	菊花形の山まみ。	
24-8	黄褐色土	陶器	灯明皿	10.8	4.1	2.2	外 焼成	胎土 黒 良好	外 茶褐色	調査 35～36年～正丸の製品。	
24-9	黄褐色土	平磁器	脚付鉢	18.9	—	(3.9)	外 白釉輪	胎土 黒 良好	内 茶褐色	本廟木堂の可能性あり。	
24-10	黄褐色土	陶器	色見	—	3.2	(2.7)	外 焼成	胎土 黒 良好	外 茶褐色	底盤内外面に「ホロ」の墨書き。	
24-11	黄褐色土	陶器	大甕	58.8	24.0	34.5	外 来往輪	胎土 黒 良好	内 黑褐色	底盤は無駄。	

窯道具（1）

遺物 番号	遺構名	種類	器種・部位 口径 底径 備考	法量 (cm)		調査・文様の特徴			色調	備考
				口徑	底径	高さ	調査・手法	胎土・焼成		
11-1	燒成室	窯道具	粘土紐	4.8	—	5.0	1.6 中央に 1.5cm の円孔	胎土 黒 良好	外 灰色	輪状のヨリ土 上面に焼成の痕跡。
11-2	燒成室	窯道具	トチン	6.4	—	9.9	1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 赤褐色	円柱形トチン。
11-3	燒成室	窯道具	トチン	6.2	—	6.5	10.1 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	調査トチン。
11-4	燒成室	窯道具	トチン	6.8	—	7.5	10.9 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	調査トチン。
11-5	燒成室	窯道具	トチン	7.0	—	7.8	13.4 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	調査トチン。
11-6	燒成室	窯道具	トチン	8.9	—	9.2	13.8 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 赤褐色	調査のトチン。
11-7	燒成室	窯道具	筒形トチン (14.1) (19.2)	7.7	—	7.7	1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	ラッパ状の中空の脚部。
11-8	燒成室	窯道具	津輪 (身) (19.6) (20.5)	8.7	—	8.7	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 赤褐色	底部外面に焼跡が沿る。
11-9	燒成室	窯道具	津輪 (身) (23.0) (22.8)	13.1	—	13.1	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 小赤褐色	底部外面に焼跡が沿る。
11-10	燒成室	窯道具	津輪 (身)	18.5	—	19.0	12.3 外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	内 赤褐色	底部外面に調査の痕跡。
11-11	燒成室	窯道具	津輪 (身) (30.5) (29.9)	11.6	—	11.6	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 水褐色	底部内面に「御」の刻書。
11-12	燒成室	窯道具	津輪 (身) (30.7) (30.4)	12.2	—	12.2	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 桐色	底部内面に「御」の刻書。
13-4	素燒室・埋出	窯道具	足付トチン	5.7	—	1.5	3 星	胎土 黒 良好	外 黑褐色	上下面にあ切り痕。
13-5	素燒室・埋出	窯道具	足付トチン	8.8	—	2.3	4 星	胎土 黒 良好	外 黑褐色	上下面にあ切り痕。
13-6	素燒室・埋出	窯道具	トチン	6.5	—	7.0	13.5 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 赤褐色	調査トチン。
13-7	素燒室・埋出	窯道具	トチン	7.2	—	8.5	15.1 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	調査トチン。 下方に焼付着。
13-8	素燒室・埋出	窯道具	足付輪トチン (15.2)	4.1	—	4.1 残存 2 分の 1 だが 6 尺か	胎土 黒 良好	外 黑褐色	上下面にあ切り痕。	
13-9	素燒室・埋出	窯道具	津輪 (身) (—)	—	(27.0)	(1.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	胎土 黒 良好	外 黑褐色	底部内面に空記号の刻印あり。
20-1	物原	窯道具	足付トチン	6.8	—	1.9	3 星	胎土 黒 良好	外 黑褐色	上下面にあ切り痕。
20-2	物原	窯道具	足付輪トチン	16.0	—	3.8	一部欠損するが 7 尺か	胎土 黒 良好	外 黑褐色	上下面にあ切り痕。
20-3	物原	窯道具	トチン	7.5	—	12.0	14.6 1mm 前後の砂粒を多く含む	胎土 黒 良好	外 黑褐色	調査トチン。

遺物観察表

窯道具（2）

遺物 番号	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考	
				口径	底径	高さ	調整・手法	耐土・焼成				
20-4	物原	窯道具	押鉢(身)	15.0	17.8	11.2	外 内 回転ナデ	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	側面部に「か」の刻書。	
20-5	物原	窯道具	押鉢(身)	(28.7)	(26.0)	11.2	外 内 回転ナデ	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	底部内面に「御」の刻書。	
20-6	物原	窯道具	丸トチン 丸ハマ	10.8～18.8	(5.8)	丸トチン上面に5箇所の貝殻み紋跡	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	丸トチンと丸ハマは割砂で接着している。貝殻み紋跡に使用した焼口。		
20-7	物原	窯道具	輕板か	7.1～11.3	1.6	1mm以下の砂粒を含む	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	真を軸用した可動性あり。		
25-1	黄褐色土	窯道具	足付トチン	6.9	1.8	5足	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	上下面に施切り痕。 下曲中央に削痕。		
25-2	黄褐色土	窯道具	トチン	5.8～6.1	(10.8)	1mm前後の砂粒を多く含む	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	丸形トチン 外側に水	丸形トチンの刻書。	
25-3	黄褐色土	窯道具	トチン	7.1～8.5	20.5	1mm前後の砂粒を多く含む	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	丸形トチン 外側3箇所に「呂ゆ」の刻印。		
25-4	黄褐色土	窯道具	押鉢(身)	(19.0)	(19.8)	12.3	外 内 回転ナデ	耐土 焼成	面 不良	外 内 青褐色	1mm前後の砂粒を多く含む。	
25-5	黄褐色土	窯道具	押鉢(身)	(19.7)	(20.0)	13.3	外 内 回転ナデ	耐土 焼成	面 良好	外 内 青褐色	1mm前後の砂粒を多く含む。	

土製品

遺物 番号	遺構名	種類	法量			色調	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
9-9	燒成室	土鍋	6.0	2.6～5.6	—	灰色	中央に直径1.5cmの円孔をもつ。
13-1	素燒室・煙出	押型(八角皿)	(17.4)	(10.2)	3.0～5.3	褐色	素用品の押型。内外面に笠母付着。布目版あり。
13-2	素燒室・煙出	押型(輪花皿)	(16.0)	(17.2)	3.8～6.0	褐色	素用品の押型。直径9.6cm×セカトの押型。内外面に笠母付着。布目版あり。
13-3	素燒室・煙出	土鍋	6.4	3.9～6.8	—	褐色	中央に直径2.2cmの円孔をもつ。

瓦

遺物 番号	遺構名	種類	法量			色調	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
25-6	黄褐色土	瓦瓦	27.7	(23.7)	1.7	赤褐色	門面の尻側を除いて束持軸を施す。
25-7	黄褐色土	瓦瓦	29.0	(23.9)	1.6	灰色	裏面が黒化。外面に増加のキラコ付着。

写 真 図 版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例:図版9_9-1は第9図1を示す。)



1 調査地調査前遠景（若山丘陵部）（南から）



2 近代石積（本船木窯別荘） 検出状況（南から）

図版2 窯跡



1 連房式登窯跡 検出状況 (南から)



2 調査区中央横断土層断面 (低位部) (北から)



1 連房式登窯跡 完掘後全景（南から）



2 連房式登窯跡 完掘後全景（北から）

図版4 窯跡



1 焼成室 完掘後 (南西から)



2 狹間（通焰孔） 完掘後 (南から)



1 素焼室 小口・焚庭（火床） 完掘後（西から）



2 焼成室東壁 焼土・トンバリ・窯壁片 堆積状況（西から）

図版6 窯跡



1 狹間（通焰孔）・窯壁 完掘後（南西から）



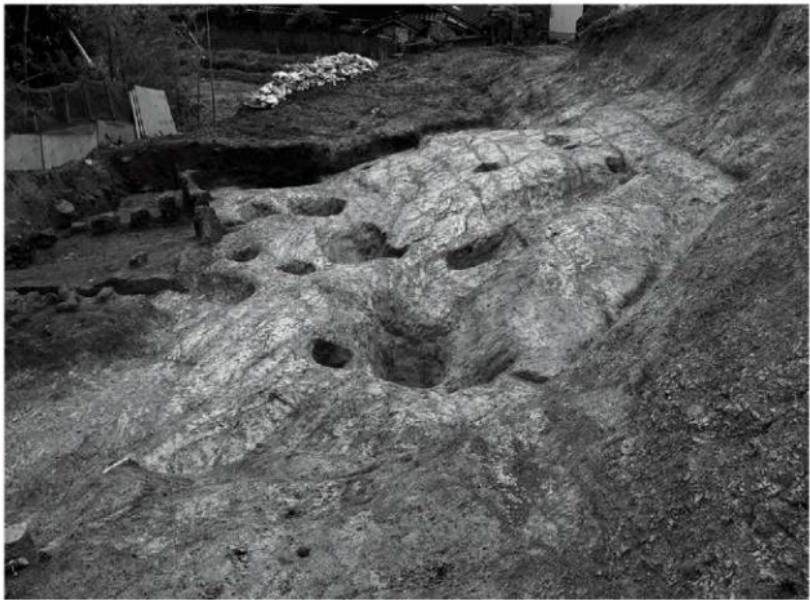
2 窯壁 検出状況（南から）



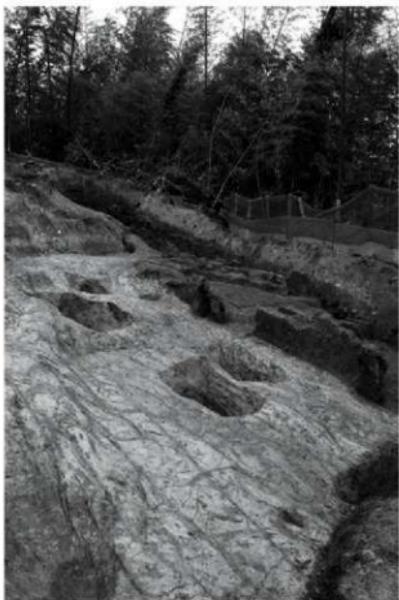
3 焼成室 小口側窯壁 検出状況（南から）



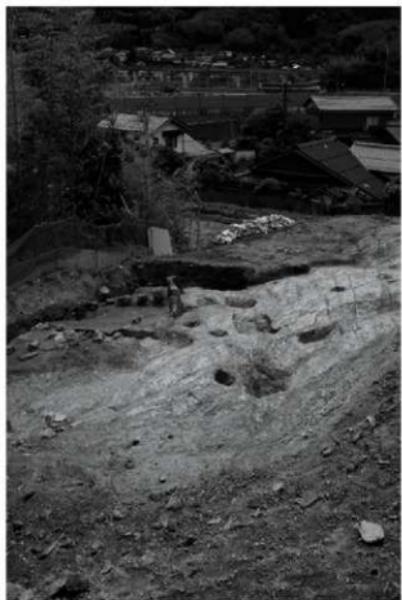
4 素焼室 小口側窯壁 検出状況（南から）



1 作業場・覆屋（柱穴）完掘後（北から）



2 作業場 完掘後（南西から）



3 作業場・連房式登窓跡 完掘後（北から）

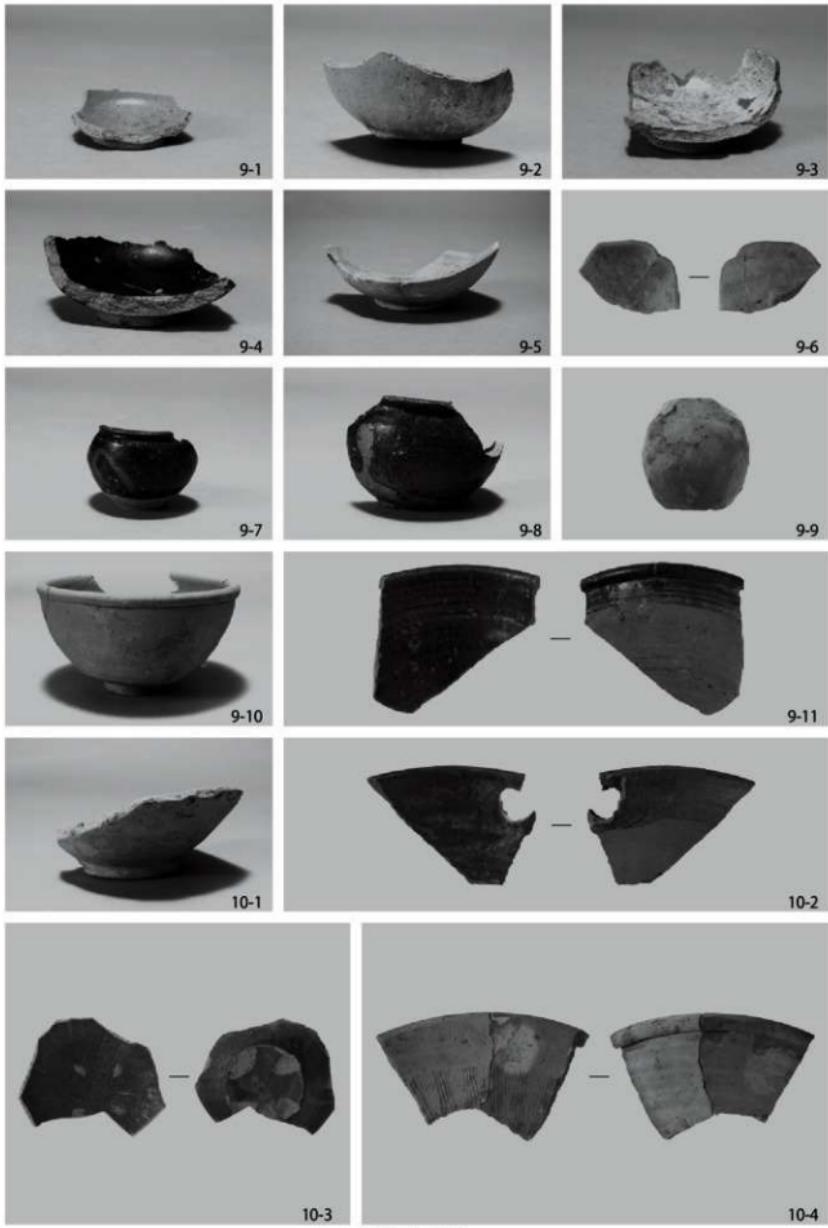
図版8 外周溝・物原



1 外周溝SD01 完掘後 (北から)



2 調査区北壁 物原土層断面 (南西から)

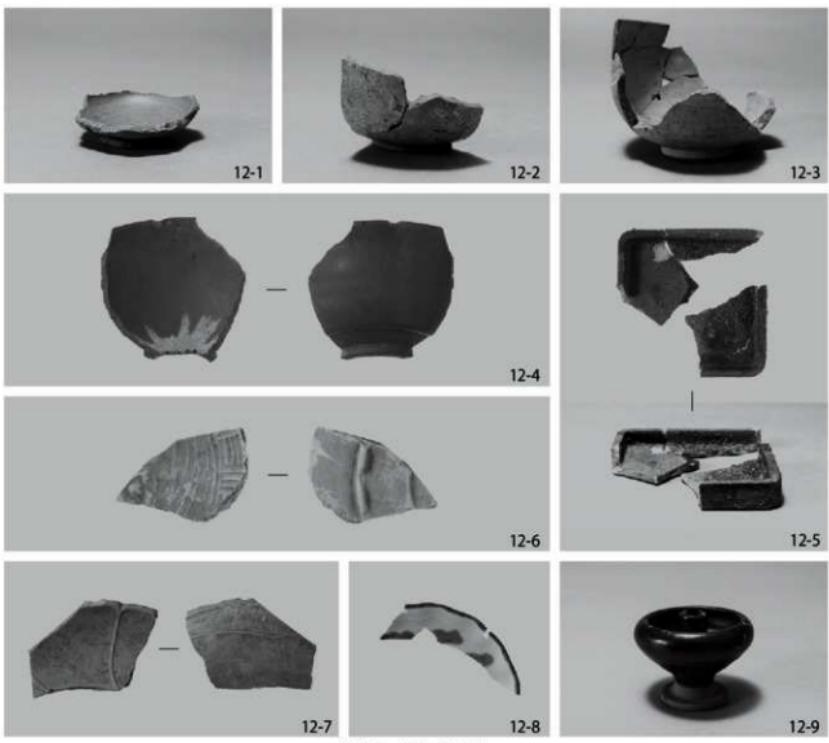


焼成室出土遺物

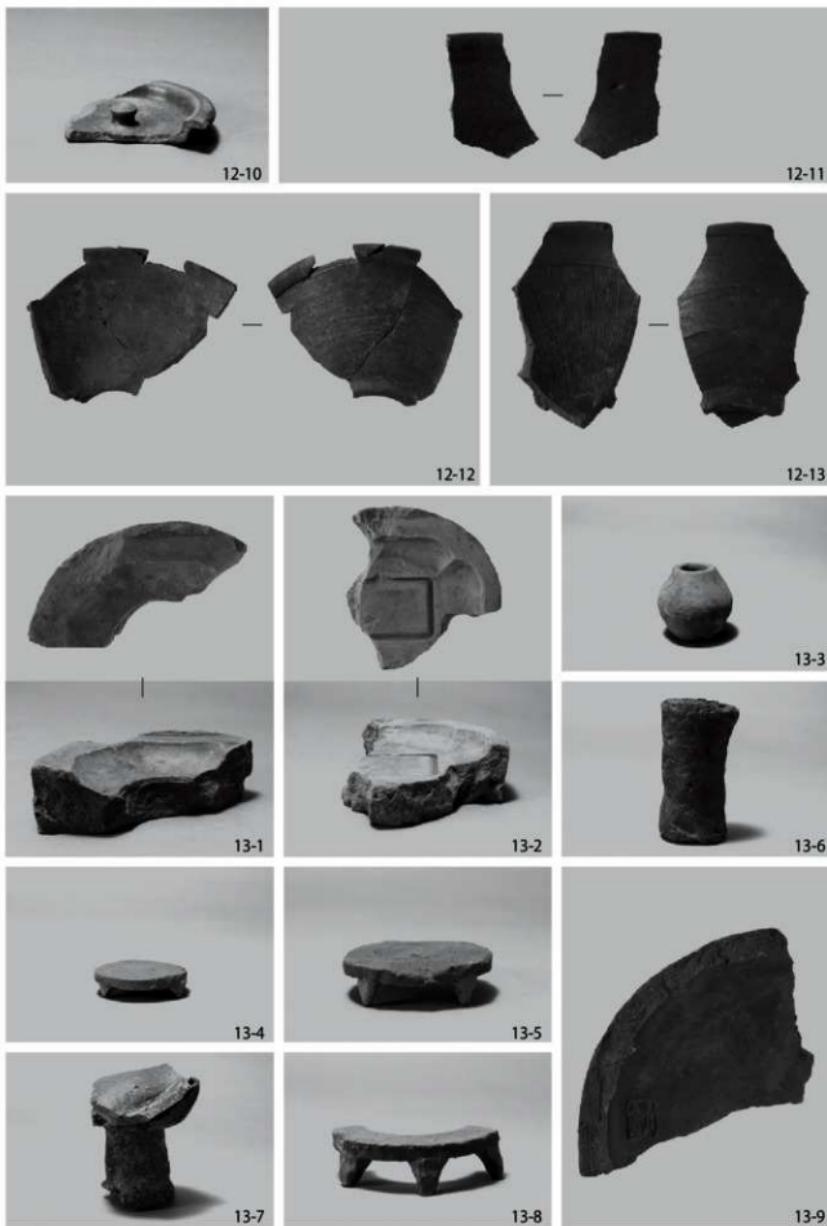
図版10 出土遺物②



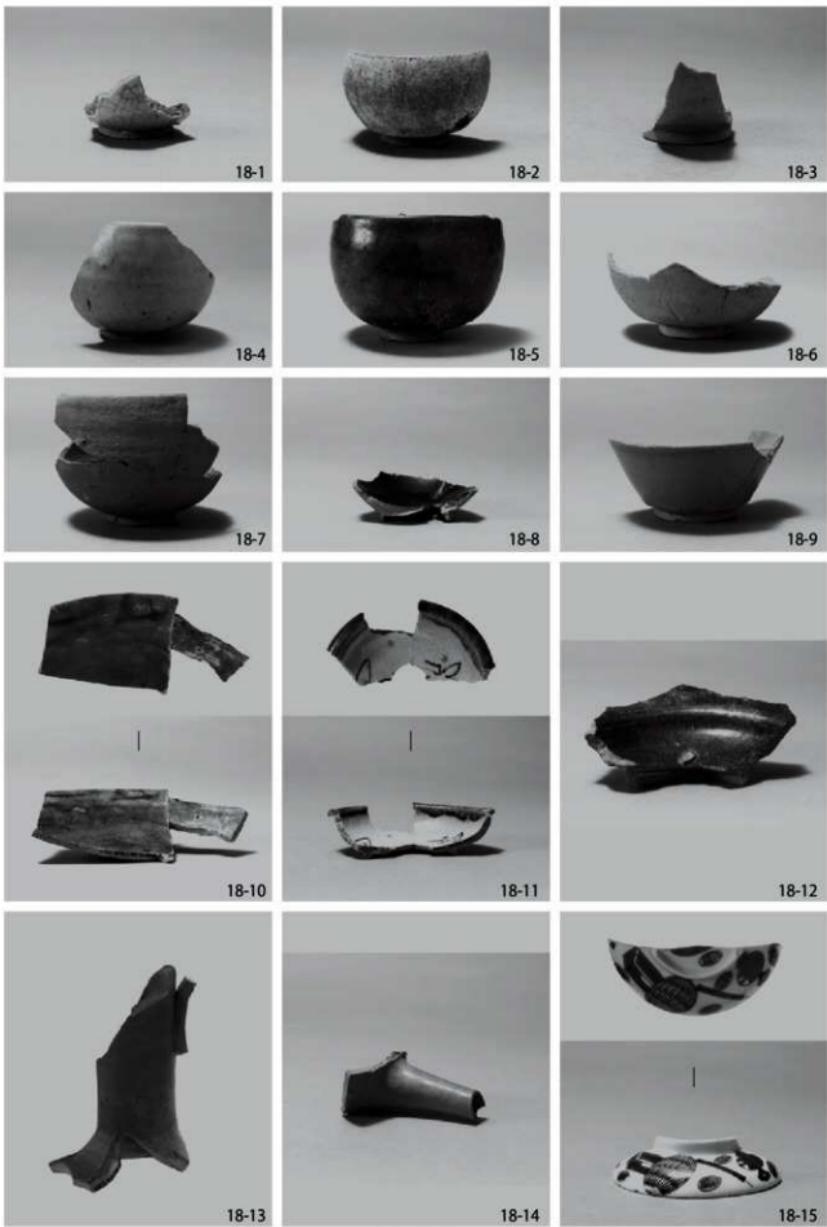
焼成室出土遺物



図版12 出土遺物④



素焼室・煙出出土遺物

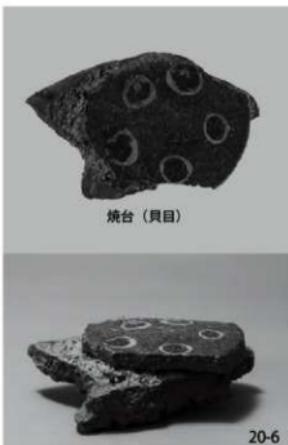


物原出土遺物

図版14 出土遺物⑥



物原出土遺物



物原出土遺物



24-1



24-2



24-3



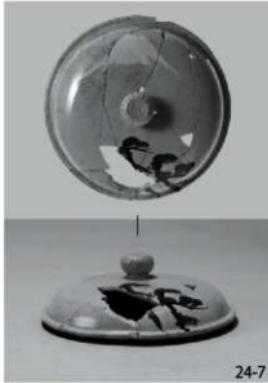
24-4



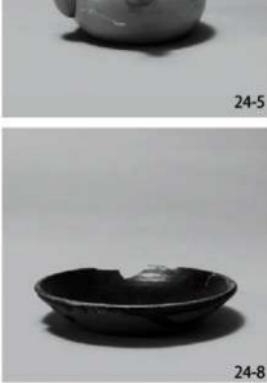
24-5



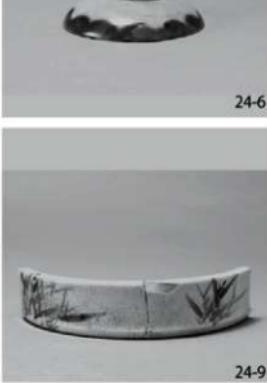
24-6



24-7



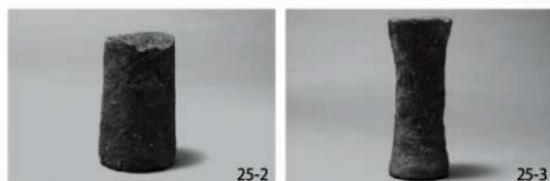
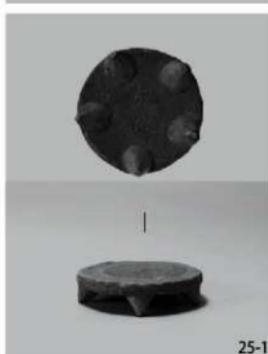
24-8



24-9

黄褐色土出土遺物

図版16 出土遺物⑧



黄褐色土出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふじなやきかまとぐん						
書名	布志名焼窯跡群						
副書名	山林崖崩れ対策工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第207集						
編著者名	小山泰生						
編集機関	松江市 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	令和4(2022)年3月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
布志名焼窯跡群	島根県松江市 玉湯町布志名 442番地4外	32201	G-165	35° 26' 12"	20200414 ～ 20200529	221m ²	崖崩れ対策工事
				133° 01' 54"			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
布志名焼窯跡群	窯跡	江戸時代 近代	連房式登窯 柱穴(覆屋) 外周溝 物原	陶器 磁器 土製品 窯道具 錢貨	布志名焼窯跡群(土屋窯→本船木窯)は、宍道湖南東岸にあたる若山の丘陵上に所在する。当窯跡の調査では、1830～1850年代の土屋窯(御用窯)と考えられる連房式登窯を1基検出した。遺物は、窯体の焼成室・素焼室・煙出および物原から、御用品と日用品の陶器や窯道具類が出土した。 今回の調査によって、松江藩の御用窯における窯構造・焼成品・窯道具の実態が分かる重要な資料が得られた。		

松江市文化財調査報告書 第207集

山林崖崩れ対策工事に伴う発掘調査報告書

布志名焼窯跡群

令和4（2022）年3月

編集・発行 島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 有限会社 黒潮社
島根県松江市向島町182-3